

中後瀬遺跡

— 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅷ —

1988.3

兵庫県教育委員会

なかごせ
中後瀬遺跡

— 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告VIII —

1988.3

兵庫県教育委員会



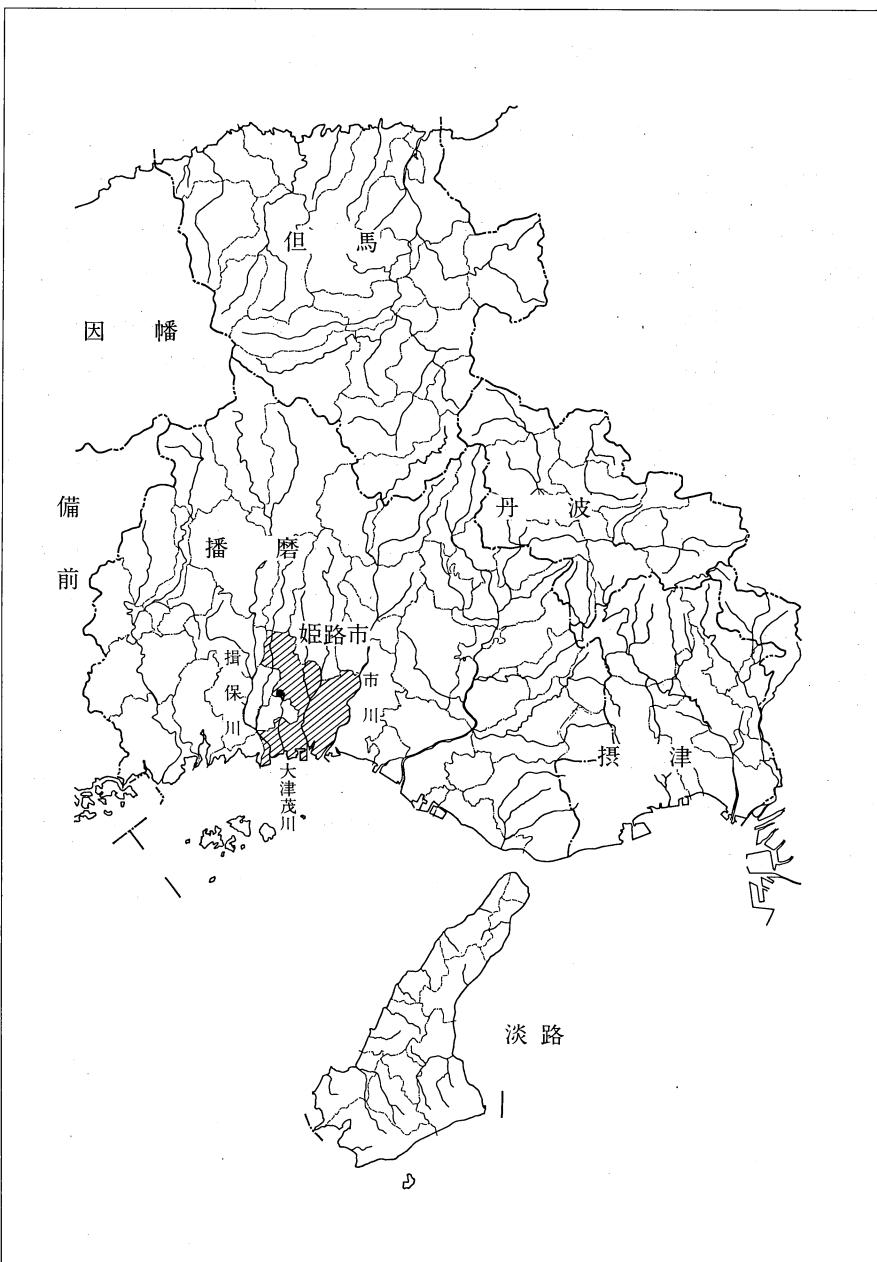
中後瀬遺跡遠景



中後瀬遺跡出土陶磁器

例　　言

1. 本書は、姫路市西脇字中後瀬・宮久保に所在する中後瀬遺跡の発掘調査報告書である。
併せて、隣接する姫路市石倉に所在する相野散布地の確認調査報告も掲載している。
2. 発掘調査ならびに整理作業は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて兵庫県教育委員会が実施した。確認調査は昭和59年10月24日～11月1日の5日間を、第1次全面調査は昭和59年12月7日～昭和60年1月7日の9日間を、第2次全面調査は昭和60年2月27日～3月28日の17日間の計26日を調査に費やした。また、相野散布地の調査には昭和59年10月22日～26日の5日間を費やした。
3. 調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育・文化財課技術職員 岡田章一・渡辺 昇・別府洋二が担当した。
4. 本書で示す標高値は、日本道路公団設定のB.M.を使用した値で、方位は磁北である。
5. 遺構写真は調査員が撮影した。空中写真は、朝日航洋株式会社に委託したものである。
図版1の空中写真は国土地理院撮影のものである。また、遺物写真は、渡辺が撮影した。
6. 整理作業は、昭和62年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所で実施した。
7. 執筆は、文末に記した通りである。
8. 本報告にかかる出土遺物およびスライドなどの資料は、現在兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下650-1）で保管している。



姫路市の位置

本文目次

例　　言

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	確認調査の経過	2
3.	全面調査の経過	3
4.	整理調査の経過	6
II	位置と環境	8
III	調査結果	
1.	概観	11
2.	掘立柱建物跡	12
3.	溝	18
4.	柵	22
5.	その他の遺構	23
IV	出土遺物	
1.	遺構に伴う遺物	26
2.	包含層中出土遺物	28
V	遺構・遺物の検討	
1.	遺構の検討	43
2.	遺物の検討	44
VI	まとめ	47
	付載 相野散布地確認調査結果	53

挿 図 目 次

第1図 確認調査の位置と全面調査の範囲	2
第2図 確認調査風景	3
第3図 確認調査土層断面図	4
第4図 全面調査風景	5
第5図 整理作業風景	7
第6図 西脇古墳群	8
第7図 中後瀬遺跡の位置と周辺の遺跡	9
第8図 中後瀬遺跡から見た峰相山	10
第9図 中後瀬遺跡の地形(遺構面の違い)	11
第10図 S B01 実測図	12
第11図 S B02 実測図	12
第12図 中後瀬遺跡遺構配置図	13・14
第13図 S B03 実測図	15
第14図 S B04 実測図	15
第15図 S B05 実測図	16
第16図 ピットの状況	16
第17図 S B06 実測図	17
第18図 S B07 実測図	17
第19図 S B08 実測図	18
第20図 S B09 実測図	19
第21図 S B12 実測図	19
第22図 S B10 実測図	20
第23図 S B11 実測図	21
第24図 S D01・02 実測図	22
第25図 P-23 実測図	23
第26図 P-36 実測図	23
第27図 P-62 実測図	24
第28図 P-63 実測図	24
第29図 P-97 実測図	25
第30図 中後瀬遺跡ピット内出土遺物 実測図	27
第31図 S D01出土遺物(1)	28

第32図	S D01出土遺物(2).....	28
第33図	S D03出土遺物.....	28
第34図	土師器 実測図(1).....	29
第35図	土師器 実測図(2).....	29
第36図	須恵器 実測図(1).....	31
第37図	須恵器 実測図(2).....	32
第38図	舶載磁器 実測図.....	33
第39図	石製品 実測図.....	34
第40図	中後瀬遺跡の現状(1988.1).....	35
第41図	建物跡時期別配置図.....	49
第42図	相野散布地グリッド・トレンチ設定図.....	53
第43図	相野散布地.....	54
第44図	相野散布地坪掘土層断面図.....	55
第45図	相野散布地出土須恵器実測図.....	56
第46図	相野散布地出土土師器実測図.....	57
第47図	相野散布地出土白磁実測図.....	58

表 目 次

第1表	中後瀬遺跡出土遺物観察表.....	36
第2表	遺構一覧表.....	38
第3表	相野散布地出土遺物観察表.....	59

図 版 目 次

図版 1	中後瀬遺跡周辺空中写真
図版 2	(上) 中後瀬遺跡遠景(北から) (下) 中後瀬遺跡遠景(南から)
図版 3	(上) 確認調査トレンチ (中) S D01 (下) S D06
図版 4	(上) 遺跡遠景 (下) 遺跡東半全景
図版 5	(上) S B01

- (下) S B04~S B07
- 図版6 (上) 遺跡東半全景
(下左) S D04
(下右) S B11
- 図版7 (上) 遺跡西半全景
(下) 遺跡西半全景
- 図版8 (上) S B10~S B12
(下) S B10~S B12
- 図版9 (上左) P-23
(上右) P-36
(中左) P-62
(中右) P-63
(下左) P-97
(下右) P-115
- 図版10 中後瀬遺跡出土遺物 (1)
- 図版11 中後瀬遺跡出土遺物 (2)
- 図版12 中後瀬遺跡出土遺物 (3)
- 図版13 中後瀬遺跡出土遺物 (4)
- 図版14 中後瀬遺跡出土遺物 (5)
- 図版15 (上) 相野散布地遠景
(下) 相野散布地出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

中後瀬遺跡は、山陽自動車道建設に伴う調査で確認された遺跡である。山陽自動車道は、大阪府吹田市を起点とし、兵庫県と中国地方を縦断して山口県に至る総延長430kmの高速自動車道路である。兵庫県下では、神戸市北区まで中国自動車道と路面を共有し、姫路市まで徐々に南下し龍野市・揖保川町・相生市・赤穂市を通り、岡山県へ続いている。昭和48年に基本計画が発表されてから、日本道路公団と兵庫県教育委員会の間で協議が続けられてきた。それを受けた分布調査によって、中後瀬遺跡はNo.18「西脇散布地」要調査地点として挙げられている。中後瀬遺跡周辺は、大津茂川によって形成された氾濫原などで、水田となっている平野部分全体に須恵器・土師器などの分布が見られた。姫路西インターチェンジからトンネルとなる破盤神社までの全域が要調査地域である。石倉・相野・西脇の3地区に跨がっており、石倉・相野地区を相野散布地として、西脇地区を西脇散布地として確認調査を実施した。

調査依頼は昭和59年度にあり、当初計画に組み込まれていた。用地買収が、龍野市域に比べるとスムーズで大体工事の発注も59年度下半期に出されることになった。兵庫県教育委員会の年度調査計画では、山陽自動車道関係の調査は1パーティが7月から予定されており、揖保川町半田山墳墓群の調査が終了した段階で、相野散布地・西脇古墳群の確認調査に入ることになっていた。他のパーティが西脇散布地の確認調査を実施する予定であったが、調査時期が早まったため、調査日程が合わなくなってしまった。確認調査結果は、日本道路公団・兵庫県教育委員会ともに今後の計画を立てるために早急に必要なため、相野散布地・西脇散布地の確認調査を併せて行うこととした。半田山墳墓群は、当初2基の墳墓（古墳）と2箇所の古墳状隆起の調査であったが、墳墓（古墳）4基と集団墓が検出され、調査終了時期が大幅に遅れるようになった。そのため、確認調査結果を早急に入手するため、半田山墳墓群の調査を中断して確認調査を着手することになった。調査は、相野散布地から行い、継続して西脇散布地を実施した。昭和59年10月22日から2地点で計7日間確認調査に費やした。

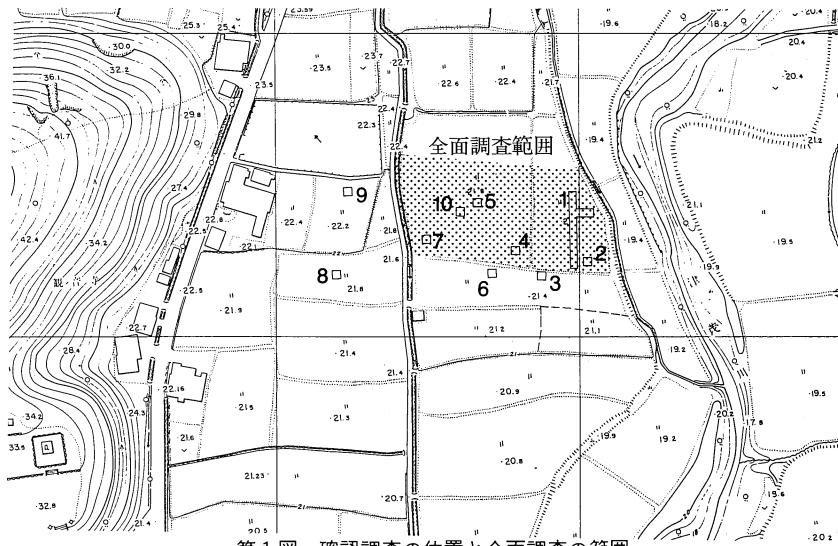
確認調査の結果、要全面調査の部分が約1540m²確認された。当初計画に入っていたことから、協議が行われ変則的な全面調査を年度内に実施することとなり、12月～1月初旬と2月末～3月の2回の全面調査を行った。

整理作業は、調査員の整理工程の都合などで遅れることとなり、昭和62年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所で実施した。

2. 確認調査の経過

分布調査の結果を受けて、確認調査を実施した。姫路西インターインジからトンネルとなる破盤神社北側までのほぼ水田部分全域を対象とした。調査は基本的には20mピッチで2×2mの坪を設定して確認することとしたが、地形などを勘案して多少変化している。明らかに旧河道と思われる部分は、確認調査を行わず掘削時に立ち合うこととした。また、分布調査で遺物の確認されていない地点は坪を設定していない箇所もある。姫路西インターインジ寄りの約50mについては、姫路西インターインジ本体工事の資材置き場として用地が必要になったことから、先行して確認する必要が生じてきた。この部分は、遺物の採集もなく一段低くなっていることから、遺跡の存在の可能性は低いものと思われたので、機械掘削によって遺跡の確認を行った。半田山墳墓群調査中の8月28日に立ち会い調査を実施した。

その他の地域については、昭和59年10月23日から主に東側から確認調査を実施した。その結果、相野散布地では一部包含層が確認されたので、トレンチ調査に切り変えたが、遺構は確認されなかっただため、遺物包含部分についてのみ、機械掘削によって遺物を採集した。西脇散布地については、グリッド10カ所のうち6カ所で遺構面と思われる面を検出した。遺物の出土状況が希薄で、明らかな遺構が確認出来なかっただので、万全を期すため東側の1・2グリッド間に幅2mで南北22mのトレンチとそれに直交する東西6mのトレンチを設定して精度を高めた。トレンチ調査で、建物跡と溝を確認し、黄灰褐色土・茶褐色土をベースとする遺構面が広がっていることが判明し、約1,540m²について全面調査が必要となった。その他4カ所では遺構面になる土層が存在せず、礫層が広がっている。



調査の組織

発掘調査・整理調査ともに日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり調査を行った。

調査事務 社会教育・文化財課

課 長 西 沢 良 之

文化財担当参事 大 西 章 夫

調査担当 技 術 職 員 岡 田 章 一

技 術 職 員 渡 辺 昇

調査参加者

出羽一雄・山澄達一・福本豊一・

森澤時子・土井栄子・藤田鈴枝・

三宅康子・瀧北ゆき子・出羽

操・小野貞江・小野絹子・房安

まみ・小野かめの・井垣あきの・

井垣みつぎ・井垣ちゑ子・井垣

加代子・井垣博子・井垣久枝・

井垣甫古・田中チエ子・村上清

美・出田敬子・赤松千恵子・金

治美香

調査日誌抄

昭和59年10月22日(月)～26日(金)

第2図 確認調査風景

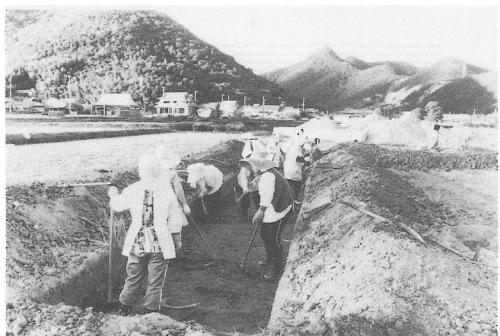
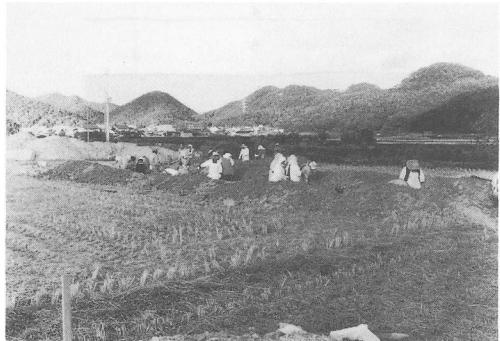
相野散布地から坪掘り調査開始する。相野散布地の坪掘り調査は3日で終え、25・26両日はトレンチ調査を行うが、遺構は認められず、遺構面も検出されなかった。西脇散布地は24日から3日間行い、遺構面検出される。

10月30日(火)～11月1日(木)

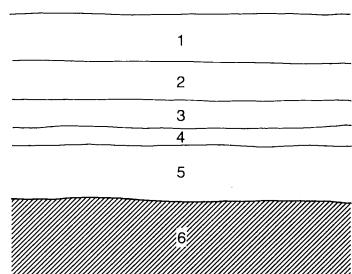
遺構の密度や遺構面の数などを調べるため、1・2グリッドの間に2本のトレンチを設定する。柱痕のあるピットなど検出され、全面調査範囲など確定し、確認調査終了する。

3. 全面調査の経過

当初、全面調査については、昭和60年度以降を予定していたが、工事発注の都合などで年度内の対応を迫られた。しかし、兵庫県教育委員会の昭和59年度当初計画では、中後瀬遺跡の全面調査は予定に組み込まれていなかった。一方、同じ日本道路公団の事業である近畿自動車道舞鶴線の調査も本格化し、調査員が不足している状況であった。その様な状況であっ

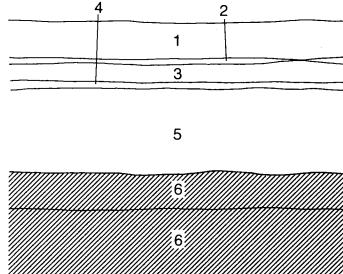


1G



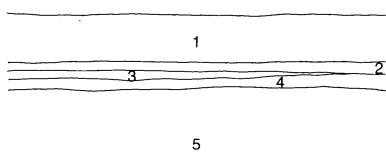
- | | |
|---------------|-----------|
| 1. 耕 土 | 4. 黄色粘土 |
| 2. 搅乱土(床土+耕土) | 5. 黄灰色砂質土 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 6. 黄灰色粘質土 |

5G



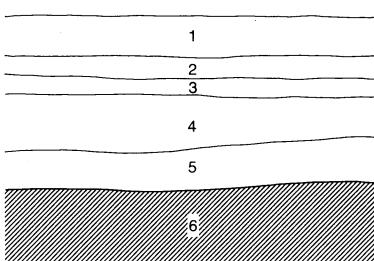
- | | |
|-----------------|-----------|
| 1. 耕 土 | 4. 灰色粘土 |
| 2. 黄褐色土(床土) | 5. 黄灰色粘質土 |
| 3. 灰色粘土(マンガン含む) | 6. 茶白色粘土 |

2G



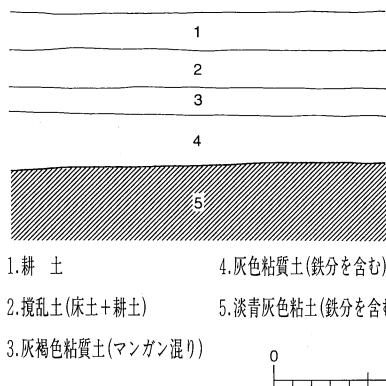
- | | |
|--------------|-----------|
| 1. 耕 土 | 4. 灰褐色砂質土 |
| 2. 床 土 | 5. 黄灰色砂質土 |
| 3. 耕土(灰色砂質土) | 6. 黄灰色粘質土 |

7G



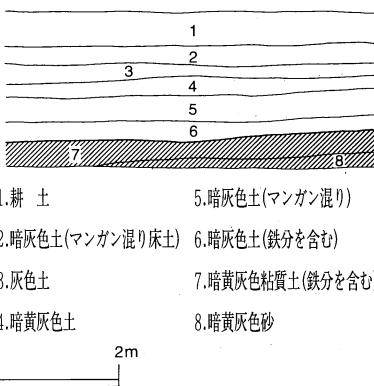
- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1. 耕 土 | 4. 灰色粘質土(マンガン・鉄分含む) |
| 2. 黄褐色(床土) | 5. 淡青灰色砂(鉄分混り) |
| 3. 灰褐色土(マンガン混り) | 6. 暗黄灰色粘質土 |

4G



- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. 耕 土 | 4. 灰色粘質土(鉄分を含む) |
| 2. 搅乱土(床土+耕土) | 5. 淡青灰色粘土(鉄分を含む) |
| 3. 灰褐色粘質土(マンガン混り) | |

9G



- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. 耕 土 | 5. 暗灰色土(マンガン混り) |
| 2. 暗灰色土(マンガン混り床土) | 6. 暗灰色土(鉄分を含む) |
| 3. 灰色土 | 7. 暗黄灰色粘質土(鉄分を含む) |
| 4. 暗黄灰色土 | 8. 暗黄灰色砂 |

第3図 確認調査土層断面図

たため、山陽自動車道の調査員も近畿自動車道舞鶴線の調査に入る計画になっていた。日本道路公団と県教育委員会の両者の協議によって、昭和59年度第4四半期を近畿自動車道舞鶴線の調査に入る予定であったが、2カ月で終了し、3月から再度山陽自動車道の調査に戻ることになった。

中後瀬遺跡の調査は、このような状況の中で実施されたため、不規則な調査となった。まず、12月から本体工事に必要な工事用道路を確保するため、北側約10mの全面調査を実施した。また、併せて渇水期しか工事を着手できない大津茂川に架構する橋脚の工事に必要な東側約15mの部分についても調査を行った。調査面積は、約890m²である。12月調査部分を便宜的に北地区と呼称する。

一旦、埋め戻したのち、南側の残り約650m²については、3月に丹波方面から戻ってから実施することとした。3月調査部分を南地区と呼称する。地区を分けたのは、調査時期が異なったということだけで、離れているとか、遺構の性格が異なるなどの意味を持ったものではないことを、断っておく。調査は、北地区を岡田・渡辺が、南地区を岡田・渡辺・別府が担当した。

調査の組織

調査事務 社会教育・文化財課 確認調査と同じ

調査担当 社会教育・文化財課

技術職員 岡田 章一

技術職員 渡辺 昇

技術職員 別府 洋二

調査補助員 池田 早恵

(神戸女子大学文学部)

小寺 千冬

(神戸女子大学文学部)



第4図 全面調査風景

調査参加者

出羽一雄・山澄達一・岩本能明・鹿島秀之・瀧北哲也・竹広晋作・森口幸彦・森田照弘・山下晋作・赤松千恵子・井垣加代子・井垣ちゑ子・井垣博子・井垣久枝・井垣甫古・井垣みつぎ・出田敬子・小野かめの・小野絹子・小野貞江・金治美香・栗川律子・瀧北ゆき子・田中チエ子・出羽 操・土井栄子・房安まみ・藤田鈴枝・三宅康子・村上清美・森澤時子

調査日誌抄

昭和59年12月10日(月)～13日(木)

重機によって上層（耕土・床土・黄褐色土）除去する。工事用道路と東側部分についての

み対象とする。東と西の水田の現在高は違うが、遺構面の標高はほぼ同じである。遺構面西側から清掃していく。

12月17日(月)～21日(金)

遺構面まで人力掘削し遺構面清掃し、遺構検出作業を行う。東側の方が遺構なく、掘立柱建物跡・溝検出する。

12月24日(月)～27日(木)

遺構掘り下げ後、全景写真撮影。基準杭を打ち、割り付け後、実測を行う。

昭和60年1月7日(月)・8日(火)

ピットの断ち割り作業を主に行う。随時、写真撮影・実測図の追加を行い、今回の調査区(北区)の調査終了する。

1月9日(水)

次回の調査との対応が可能なように控えて調査した部分について重機によって埋め戻し作業を行う。

昭和60年3月1日(金)～4日(月)

重機によって表土などの上層掘削。約30cm除去する。

3月5日(火)～7日(木)

調査再開する。遺構面まで下げ、遺構検出作業を行う。当初、部分的に遺構面2面あると考えていたが、上層の遺構は確認されなかった。

3月11日(月)～15日(金)

下層遺構面まで掘り下げ、遺構面清掃作業を始める。

3月18日(月)～22日(金)

ピットなどの遺構掘り下げ作業を行う。掘立柱建物跡比較的多く確認する。全景写真撮影後遺物出土状態図を作成し、遺物取り上げる。平面図実測を始める。

3月25日(月)・26日(火)

エレベーション記入し、ピット断ち割り作業を行う。実測図追加・写真撮影。器材など山陽自動車道現場事務所に運び、中後瀬遺跡の発掘調査終了する。

4. 整理調査の経過

整理作業は、一部雨天の日などに土器の水洗い作業を主に実施したが、本格的には昭和62年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所において行った。他の遺跡などと平行して作業を行ったが、6月から岡村真理子を中心に開始し、夏期に遺物写真を撮影し、11月から原稿執筆・編集作業を行うという非常に早いペースで進行していった。出土遺物量が少なかったこともあろうが、整理を担当して戴いた補助員のおかげである。魚住分館から神戸市兵庫区に所在す

る兵庫県埋蔵文化財調査事務所に移ってきたことと整理作業のシステムが軌道に乗ってきたからであろうと思われる。

遺物の接合・復原は八木・新浜が行い、遺物の実測は、土器を岡村・小川・伴が、石器を香春が行った。トレースは、主に遺構を伴が遺物を岡村が行い、遺物写真は渡辺が撮影した。編集は岡村・伴の協力を得て、渡辺が主担した。
(渡辺)

調査の組織

調査事務　社会教育・文化財課

課長　北村　幸久

文化財担当参事　森崎　理一

課長補佐　兼

埋蔵文化財調査係長　大村　敬通

調査担当　社会教育・文化財課

主任　岡田　章一

主任　渡辺　昇

技術職員　別府　洋二

調査補助員

岡村真理子・小川真理子

伴　悦子・八木　和子

新浜　良子・香春　由美



第5図 整理作業風景

II. 位置と環境

中後瀬遺跡は、姫路市西脇字中後瀬・宮久保に所在する遺跡である。東側に大津茂川が南流し、西側に破磐神社が鎮座している丘陵が迫っている広面積とは言えない地域に立地している。東西方向は当然調査によって限られているが、南北方向も大きく延びるとは思われない。調査着手段階の地目は全て水田であった。

当遺跡は調査結果から、数点の時期の溯る遺物は出土しているものの、大区分すれば平安末～鎌倉時代の単一時期の集落跡である。この時期の西播磨を考える上に重要な資料である『峯相記』が記されたのが、中後瀬遺跡北方の石倉山とも呼ばれる峰相山である。遺跡の存続時期とも合致しており『峯相記』を抜きには考えられず、著者と考えられている鶴足寺の高僧が常に見ていた遺跡であろう。

当遺跡は大津茂川によって形成された微高地上に立地しており、遺跡の東西ともに旧河道が確認されている。そのことから遺跡の中でも地形の変化があったことが窺われる。旧河道内に構築された建物もある。峰相山麓付近から大津茂川の流れる谷は幅を広げ始める。そして当遺跡周辺から可耕地の多い水田部分を広げて、断層による東西方向の谷部と交差し、太田へと続いて行く。全体的な地形は、北から南は当然のこととして、西から東へと緩やかに下がっている。

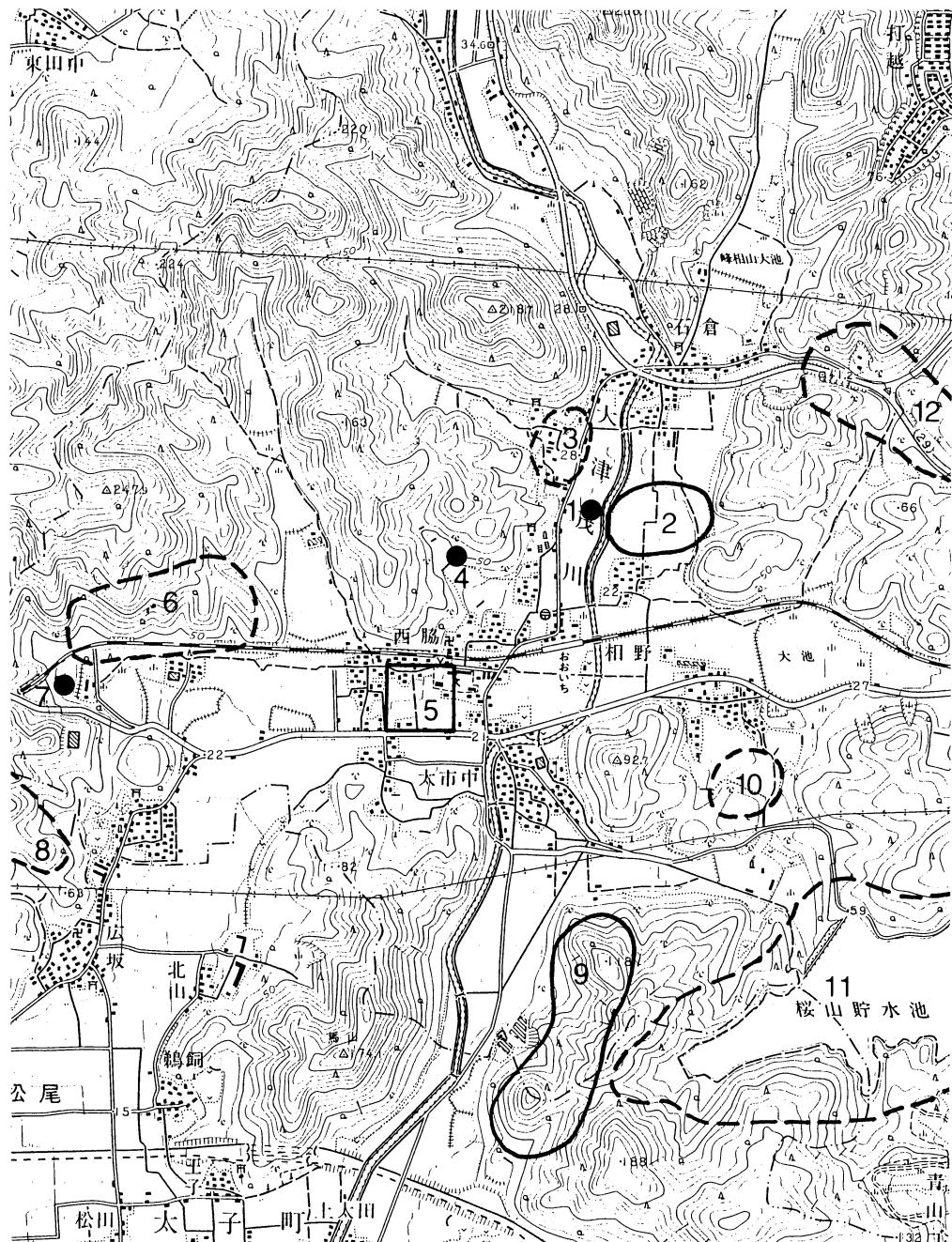
当遺跡を考える前に前代の周辺の遺跡を略述してみると、最も古い足跡は龍野市神岡町の大住寺皿池遺跡と太子町の坊主山遺跡でナイフ型石器が確認されている。大住寺皿池遺跡では播磨では数少ない黒曜石製の石器である。坊主山遺跡では旧石器時代終末～縄文時代早創期の尖頭器も出土している。姫路市街地内の八代芝崎山遺跡でも尖頭器が確認されており、最近の調査では丘陵上の龍野市龍子向イ山遺跡でも旧石器時代の遺物が出土している。揖保郡内でも遺跡の増加が予想される。

縄文時代になると、同じ西脇地内の西端の鷹ノ子池で石鏃をはじめとする石器が採集されている。揖保郡の龍野市側では片吹遺跡・北沢遺跡で早期～晚期の住居跡・土壙などが確認されており、大津茂川下流域の丁・柳ヶ瀬遺跡や太子町東南遺跡で興味ある遺構や遺物が確認されている。姫路市内では縄文人骨が出土したことで知られる辻井遺跡が飾磨郡ではあるが、東約3.0km離れて立地している。

弥生時代になると遺跡数は増大するが、中後瀬遺跡の立地する太市周辺では弥生土器が



第6図 西脇古墳群



1. 中後瀬遺跡 2. 相野散布地 3. 観音寺遺跡 4. 破磐神社西古墳 5. 西脇廃寺
 6. 西脇古墳群 7. 鷹ノ子池遺跡 8. 広坂墳墓群 9. 太市中古墳群 10. 向山遺跡
 11. 桜山窯跡群 12. 赤坂窯跡群

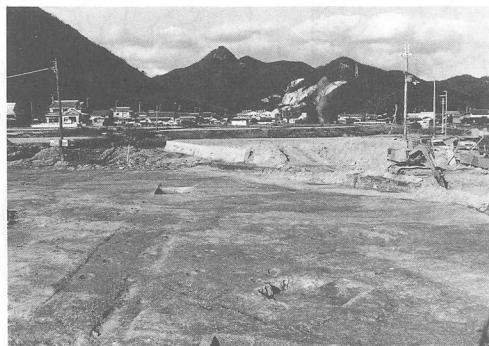
第7図 中後瀬遺跡の位置と周辺の遺跡

表面採集されているにすぎない。大津茂川下流をはじめ周辺地域では多数の遺跡が知られていることから、中後瀬遺跡周辺でも弥生時代の遺跡の存在する可能性は高いものと思われる。揖保川流域ほど墳丘墓は築かれていながら、大津茂川流域でも丁・山戸丘陵を中心に墳丘墓が確認されている。大津茂川上流域では今のところ確認されていない。南側の松尾・広坂の丘陵上に土器棺などが知られている。

古墳時代になると、散在的に前期古墳が構築されている。大津茂川流域では、縄文時代から継続して遺跡が営まれている^{よう}丁に丁瓢塚古墳が築かれている。中期の古墳も大津茂川流域には確認されていないが、後期になると他地域同様に急激に増加する。代表的な古墳群は西側の丘陵に築かれている西脇古墳群である。現在、調査が継続中であるが100基を越える大群集墳である。6世紀中葉から7世紀代まで造墓活動を継続している。また、破磐神社南側の谷部にも大型の横穴式石室が開口している。南側の丘陵部にも横穴式石室を主体部とする古墳群が見られる。

奈良時代になると、西脇古墳群で蔵骨器が検出されており、引き続き墓域として利用されていることが明らかである。また、中後瀬遺跡南方の西側の丘陵に挟まれた山懷の地点に太市駅家跡に推定されている向山遺跡が存在する。その北側の断層による谷向かいには西脇廃寺が建立されている。断層による谷間は古代山陽道として利用されていたようである。中後瀬遺跡北方の峰相山麓には美作道が通っていたと考えられている。古代山陽道沿いには楓坂を越えた龍野市側に中井廃寺が存在し、美作道沿いには奥村廃寺が、東側には辻井廃寺が建立されている。遺跡北側には観音寺という字名が残っており、事実瓦も採集されており、奈良時代の寺跡と考えられている。

平安時代以降、周辺地域は荘園となっていく。当遺跡周辺も大徳寺領の荘園の範囲として捉えられるものと考えられる。鎌倉時代後期から室町時代にかけて『峯相記』の舞台の位置を占めており、後世へと引き継いでいるようである。
(渡辺)



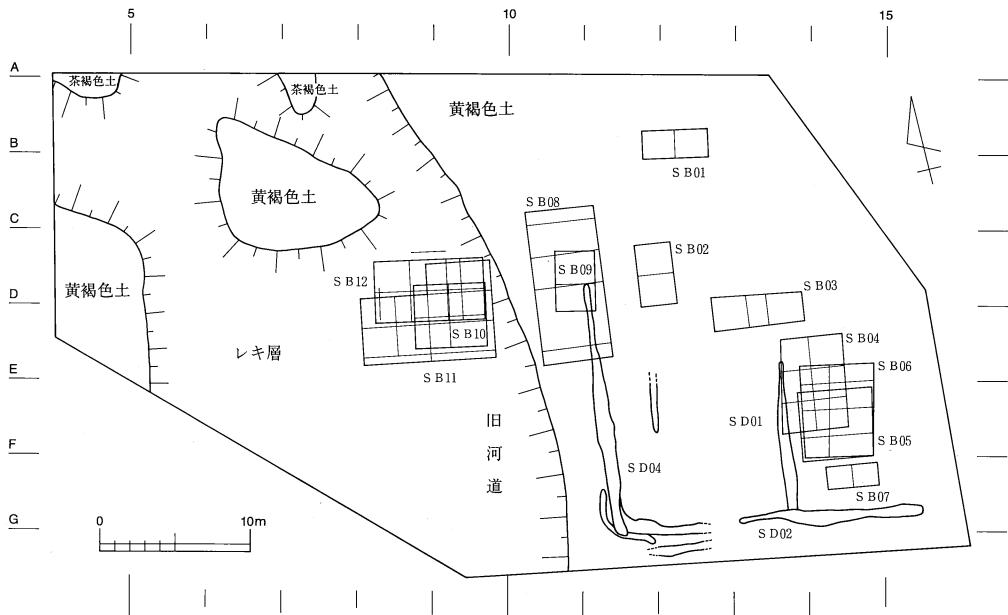
第8図 中後瀬遺跡から見た峰相山

III. 調査結果

1. 概観

遺構面の確認から調査範囲を確定したが、全面調査を実施すると、主に西側の水田で地形の変化が認められた。グリッド設定部分は茶褐色～黄褐色のベース面が確認されているのに對して、09ライン以西は旧河道などが存在しており遺構の密度は低い。旧河道は調査地内で2本に分かれている。北西コーナーと北側に茶褐色土をベースとする遺構面が見られるが、遺構は検出されなかった。南側の黄褐色土をベースとする遺構面が広がっているB06・B07にはピットが7基検出されているが、建物跡などの遺構には復原出来なかった。09ライン以東は、黄褐色土をベースとし、遺構が多数存在している。北側より南側の方が遺構は密である。調査対象地は約1540m²あり、調査地東側の水田は一段低くなってしまっており氾濫原と考えられる。調査地東端から現大津茂川まで12m離れている。ベース面の土からすると、黄褐色土のみに遺構が築かれていることになる。

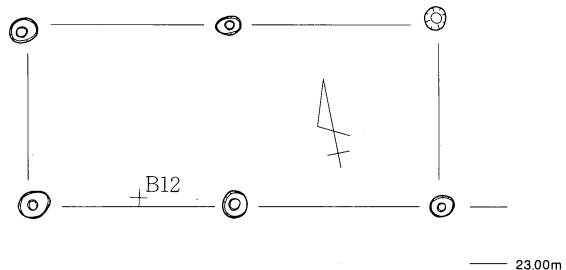
調査の結果、遺構は掘立柱建物12棟、溝6条、柵5列を検出している。



第9図 中後瀬遺跡の地形(遺構面の違い)

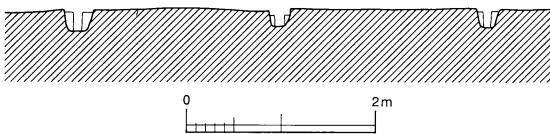
2. 掘立柱建物跡

12棟検出しているが、D E F 13
～15にはピットが集中しており、
S B 08とS B 09、S B 10とS B 12
など7棟の重複が見られる。



S B 01

東西方向に長い1×2間の建物跡で、ほぼ東西に主軸を持つ。南北1.9mで東西方向は1間2.2mの4.4mを測る。A 11・A 12の調査区北側に位置する。

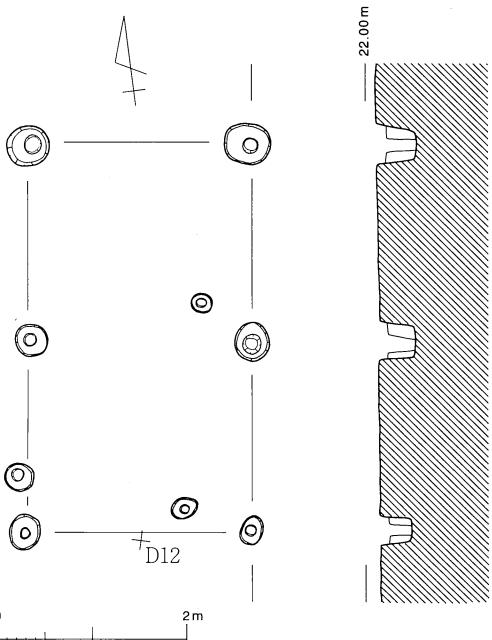


第10図 S B 01 実測図

須恵器塊底部が1点出土しているが、図化出来ない小片である。

S B 02

C 11・C 12に位置し、S B 01・S B 03と直交する位置に存在する。S B 01と5.5m、S B 03と2.2m離れている。ほぼ、南北方向に主軸を持つ1×2間の建物で、東西2.5mの妻部に南北4.0mの桁を測る。桁方向は、北から2.1m、1.9mを測る。



第11図 S B 02 実測図

S B 03

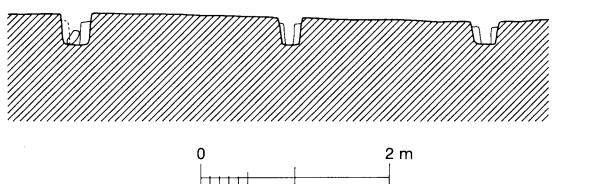
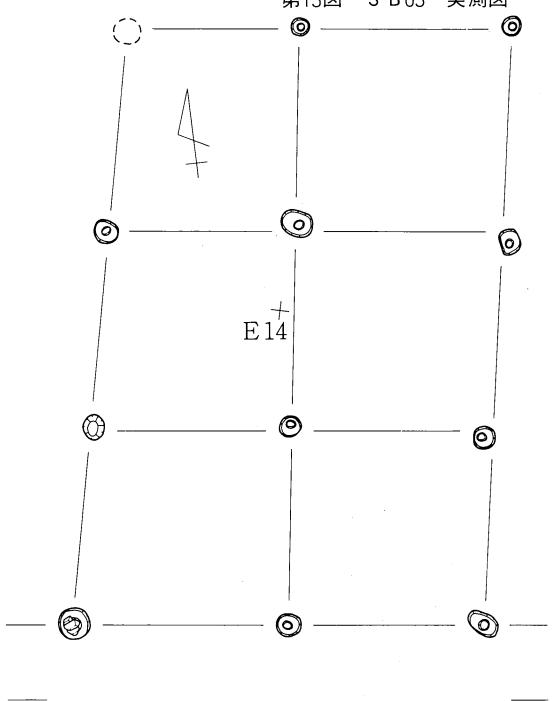
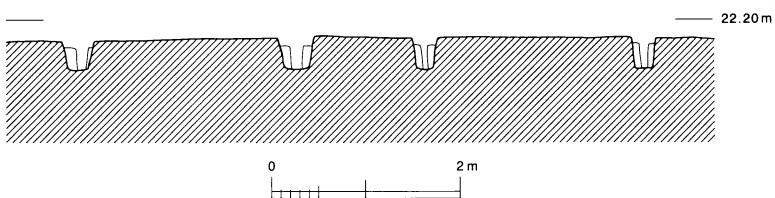
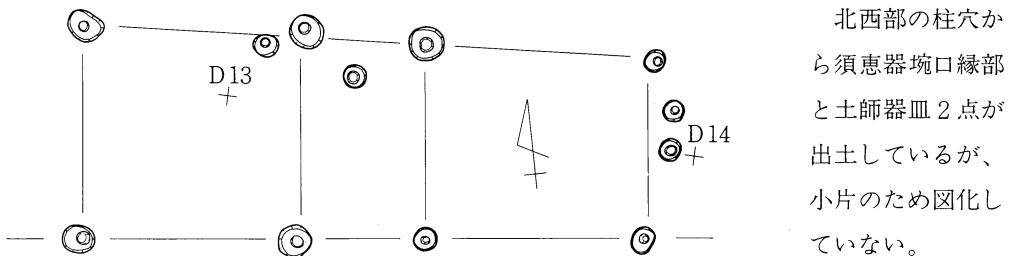
東西3間、南北1間の東西に主軸を有する建物である。S B 02の南面とS B 03の北面が直線になっており、2.2m離れている。東西6.0mで西から2.3m、1.2m、2.5mの間取りを取る。

S B 04

D E 13・14に位置する遺構で東西2間、南北3間で、ほぼ南北に主軸を持つ建物である。南辺4.4mに対して北辺4.2mとやや狭くなっている。南辺の間取りは、2.2mで北辺東側も2.2mと同様だが、西側が2.0mと0.2m狭くなっている。南北は6.4mを測り、北から2.2m、2.1m、2.1mを測る。中心の柱がS B 03東辺と一致しており1.0m離れている。S B 04廃棄後、西辺の一部に重なってS D 01が築かれている。



第12図 中後瀬遺跡遺構配置図



第14図 S B04 実測図

S B05

S B04と平面を共有する遺構で、S B04の方が古い段階の遺構である。3×3間の建物で、南北方向に主軸を持っている。南北4.6mで、間取りは北から1.2m、1.8m、1.6mを測る。東西方向は、やや歪んでおり北辺5.0m（西から1.7m、1.95m、1.35m）、南辺4.65m（西から1.7m、1.5m、1.45m）を測る。そのため、西辺はS B03・S B04と同じだが、東辺はS B06と同じ方位になっている。

柱穴から、須恵器塊口縁部・片口鉢口縁部や土師器皿の小片が出士している。

S B06

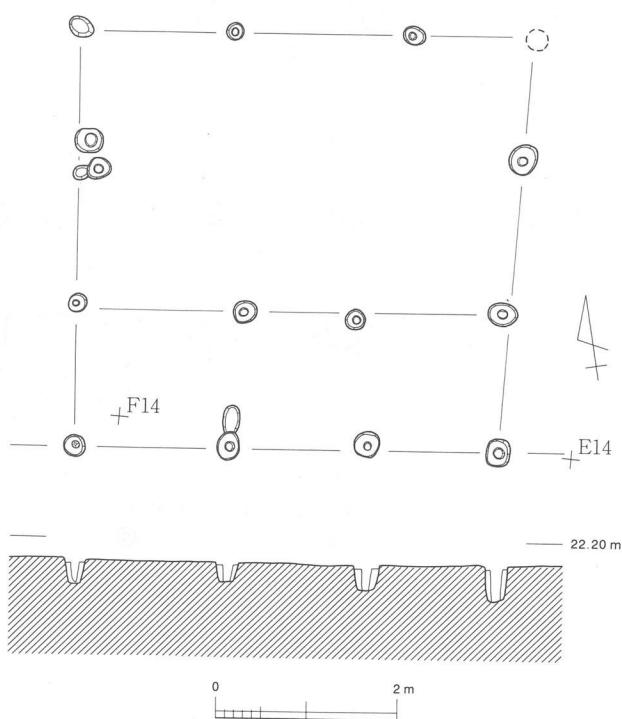
D E13・14に位置し、S B04・S B05と重複関係にある。主軸はN13°Eでやや東に振っている。東西3間、南北4間の建物で、北

側に S A02 を伴っている。南北は北から 1.3m、1.7m、1.6m、1.7m の 6.3m を測る。東西方向は歪んでおり、北辺は 4.9m (西から 2.0m、1.5m、1.4m)、南辺は 4.5m (西から 1.6m、1.6m、1.3m) を測る。

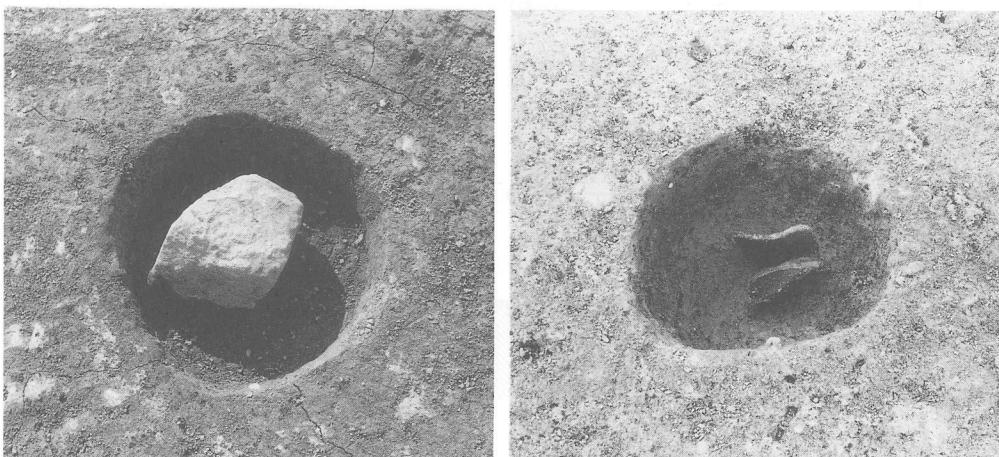
S B07

F14 に所在し、S B05・S B06 と 0.4m 南に離れている。東西方向に主軸を持つ 1 × 2 間の建物である。東西は 3.3m (西から 1.6m、1.7m)、南北は 1.55m を測る。

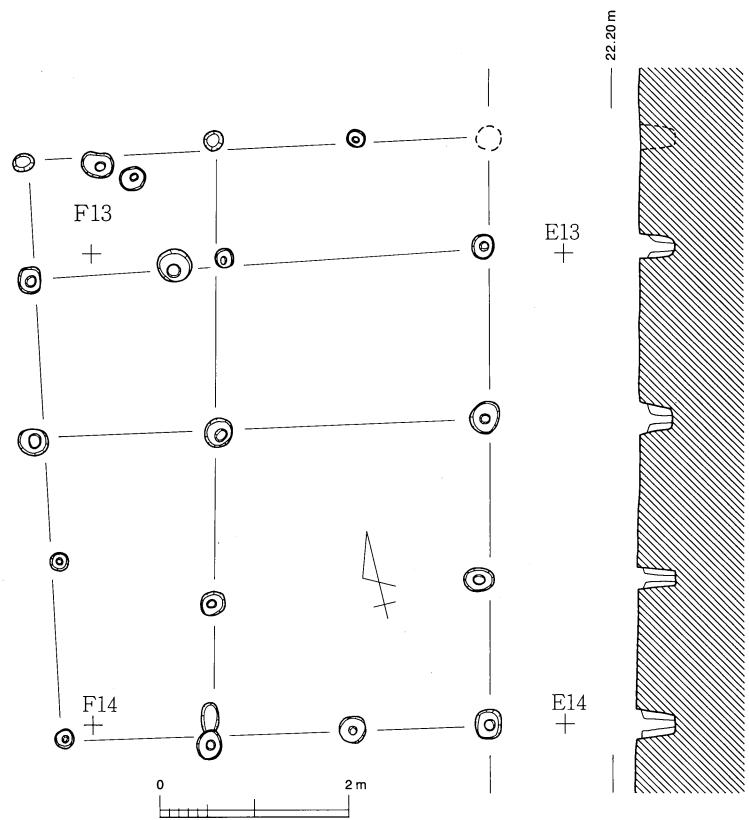
(渡辺)



第15図 S B05 実測図



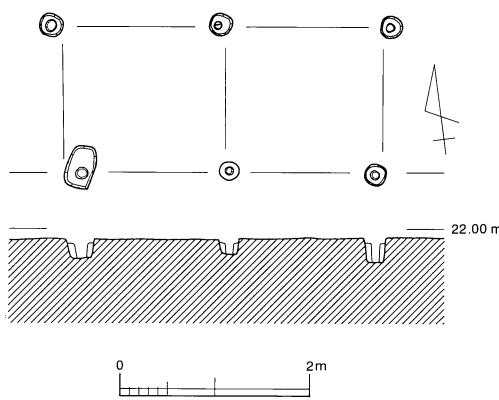
第16図 ピットの状況



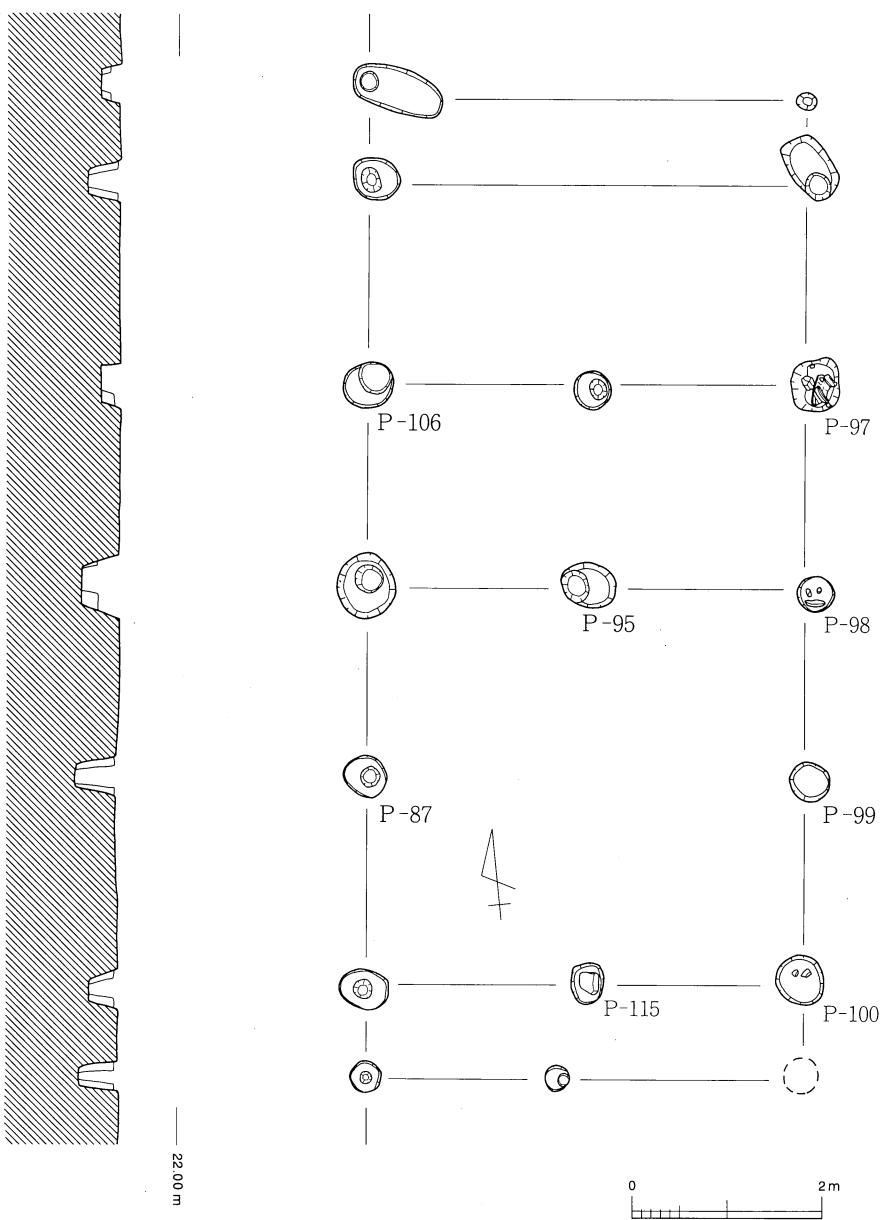
第17図 S B 06 実測図

S B 08

南北方向に長軸を置く4間×2間の建物跡で、短辺である南辺北辺の両側に庇が付く。桁行は総長約10.3m、柱間約2.1m等間、庇の長さは約0.9~1.0m、梁行は総長約4.6m、柱間約2.3m等間である。柱掘り方は最大のもので直径約70cm、深さ約40cmと他の建設跡と比べて規模が大きい。また他の建物跡では殆ど見られない礎板・根固め石を持つ柱穴が建物の東辺及び南辺に見られる。P-97は約40×15cm、厚さ約5cmの板石を敷いて礎板とし、拳大の石や土師器鍋片を利用して



第18図 S B 07 実測図



第19図 SB08 実測図

用して根固めをしている。この他にも約25×25cm、厚さ約10cmの板石を置くもの（P-115）拳大の石を入れて根固めをしているもの（P-98、P-100）がある。

S B09

S B08に重複して検出されており、S B09に比してやや角度を東に振っている。長軸方向

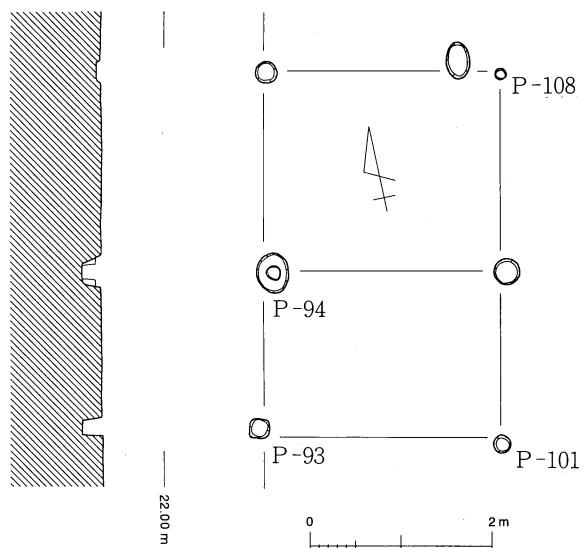
を南北に持つ2間×1間の建物である。桁行は総長約4.0m、柱間約1.8m及び約2.2mで北側がやや長い。梁行は総長約2.6mとやや長い規模を持つ。この建物は特に北2本の柱掘り方の規模が小さい。

S B10

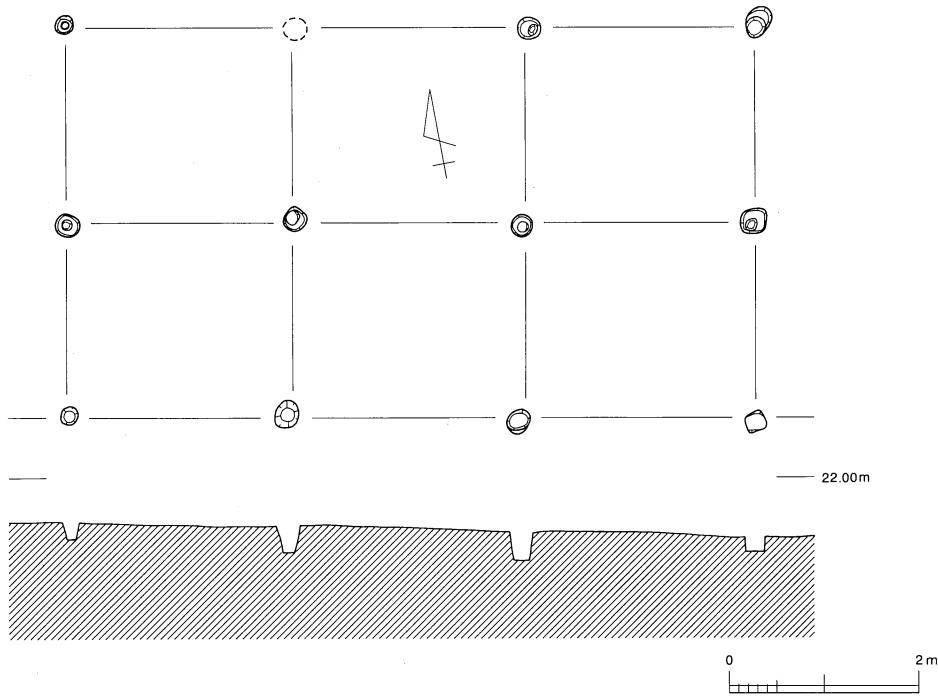
2間×2間の建物跡で東西の総長約4.7m、柱間約2.3m等間、南北は総長約4.3m、柱間約2.2m等間である。北側と西側に1間ずつ等間で柱を延ばすことができるが、目隠し塀或いは門のような施設ではなかろうか。

S B11

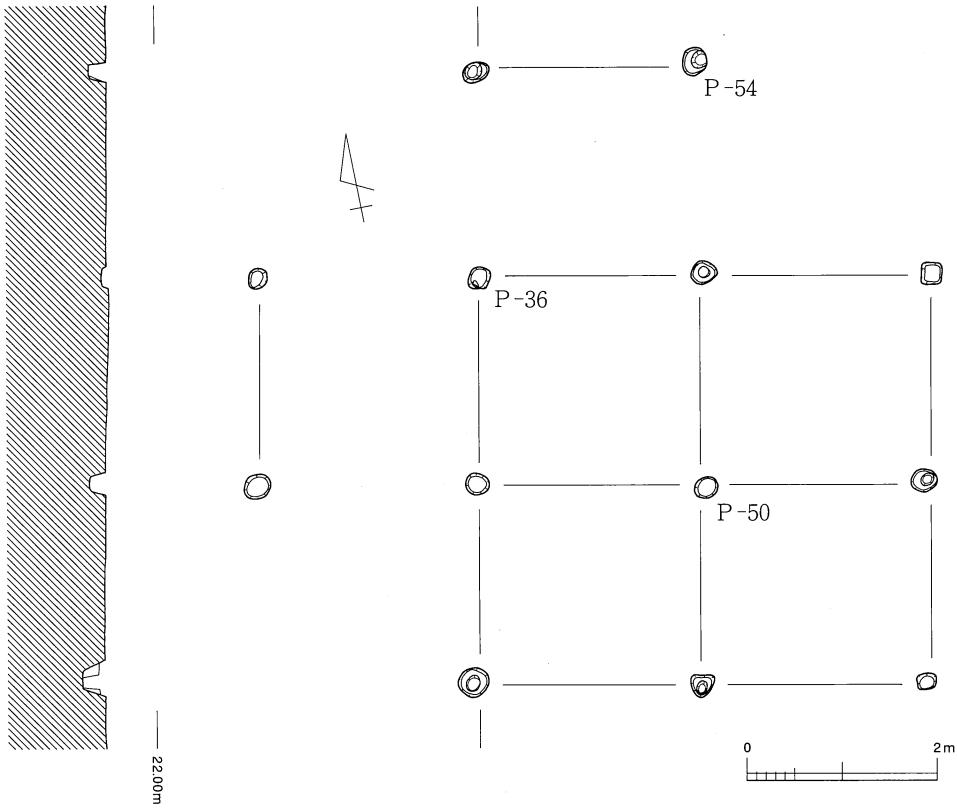
S B10と重複して検出された。長軸方向を東西に置く3間×4間の建物の北西部2間を欠いた形を持つ。桁行は総長約8.8m、柱間



第20図 S B09 実測図



第21図 S B12 実測図



第22図 S B10 実測図

約2.3m等間だが東一列のみ2.0m、梁行は総長約6.0m、柱間約2.0m等間である。南側に約0.5m幅の庇を持つ。建物の北西コーナーにあたるP-41では須恵器の胴部片を柱根底に敷いており、柱の礎板としている。

S B12

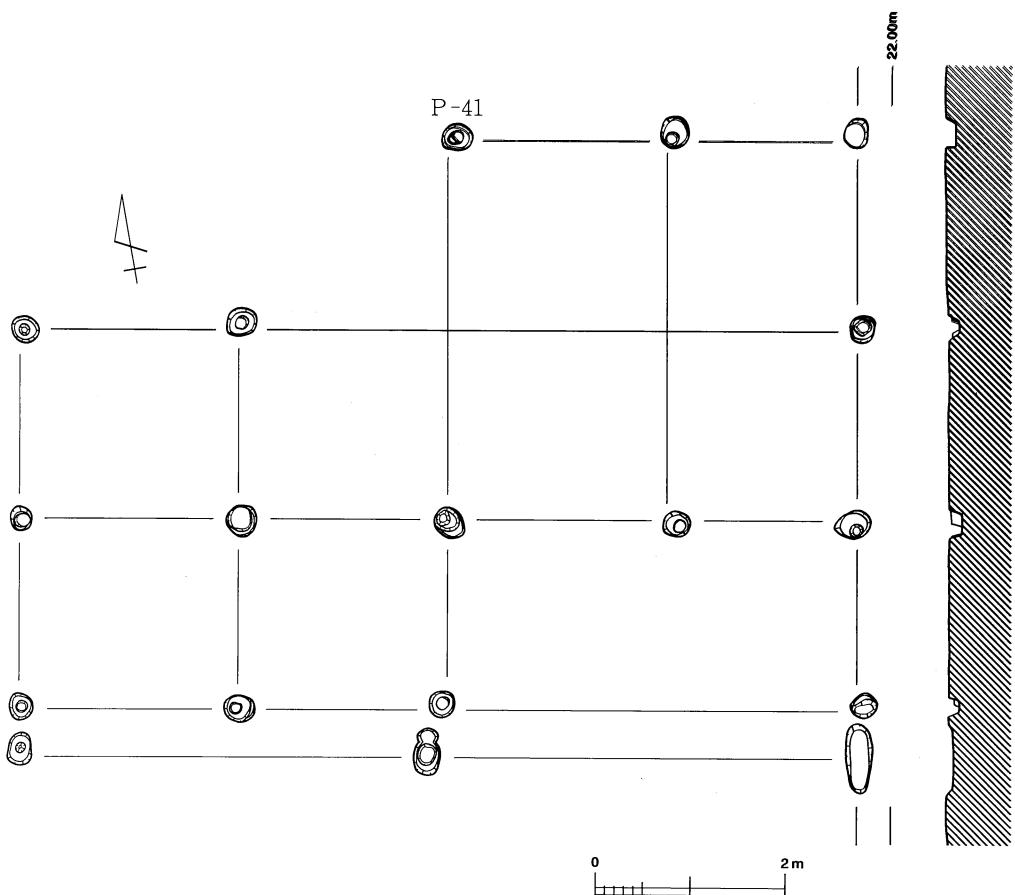
S B10およびS B11と重複関係を持ち、2間×3間の東西に長軸方向を持つ建物跡である。桁行は総長約7.3m、梁行は総長約4.1m、柱間約2.1m等間である。(別府)

3. 溝

溝は2条検出している。南北方向にS D01があり、S D01を切って直交する位置にS D02が存在する。主軸方向が直交関係にあり、有る時期の建物に伴う溝と考えられる。

S D01

南をS D02に切られており、主軸をほぼ南北に持つ。北側に向かって徐々に幅が細くなり、全長10.1mを測る。幅の最も広いところで0.9mあり、細い部分は0.3mで、深さも0.06～



第23図 SB 11 実測図

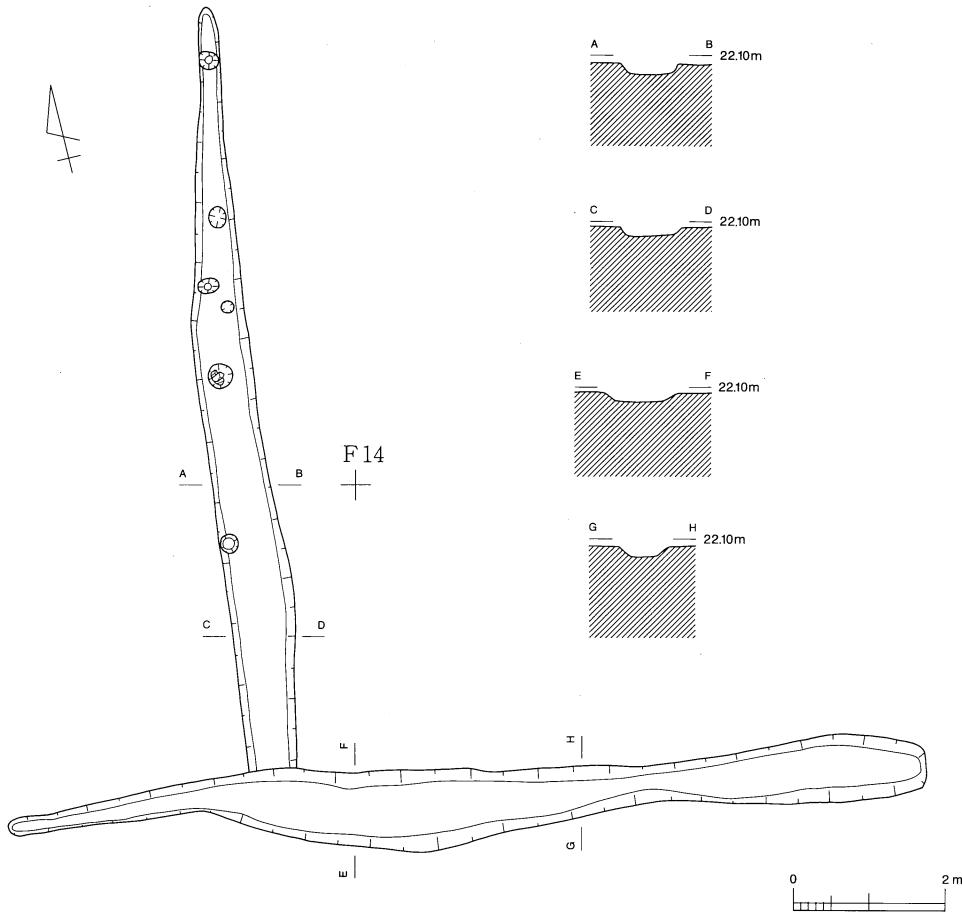
0.15mと浅いものである。

溝底に5基のピットが認められ、SB 04の建物の一部になるもので、SD 01が後出する遺構である。

SD 02

ほぼ東西に12.2m伸びる素掘りの溝である。西から3.3mのところで直交する位置にあるSD 01を切っている。西側は、徐々に幅を狭めて終息しているが、延長上に南地区SD 03が存在し、関連する溝の可能性も考えられる。SD 01を切る付近から東は0.6~0.8mの幅を測り、その西側は0.3mと浅い。深さは、0.1~0.3mとSD 01よりは深いが、浅い溝である。

SD 02以南およびSD 02東端寄り東側に遺構は存在せず、遺構面を限る性格を持つものと思われる。(渡辺)



第24図 SD 01・02 実測図

SD 03

調査区の南端をほぼ東西に走る溝で、途中で途切れてはいるもののSD 02が延びたものと考えている。幅約0.6m、深さ約15cmを測る。この溝はSD 04とほぼ直角に交わって終わっているため、SD 04とも同一のものである可能性があるがSD 04が一部掘り直されていると思われるため断定することができない。

SD 04

ほぼ真っ直ぐ南北方向に約21m走る溝で幅の広いところで約1.2m、深さ約15cmを測る。埋土は灰褐色極細砂単一層である。この溝はSB 08・SB 09と切り合い関係にある。

S D 05

S D 04と平行に南北方向に走る溝で幅約0.4m、深さ約10cmの小溝である。埋土は灰褐色極細砂である。遺物はほとんど出土していない。

S D 06

調査区の南端を東西方向に走る溝である。他の遺構と異なり、遺構検出面より上方から切り込まれていることが調査区南壁面で確認されている。幅約50cm、溝内には河原石が組まれており、近世以降の暗渠排水路であると思われる。
(別府)

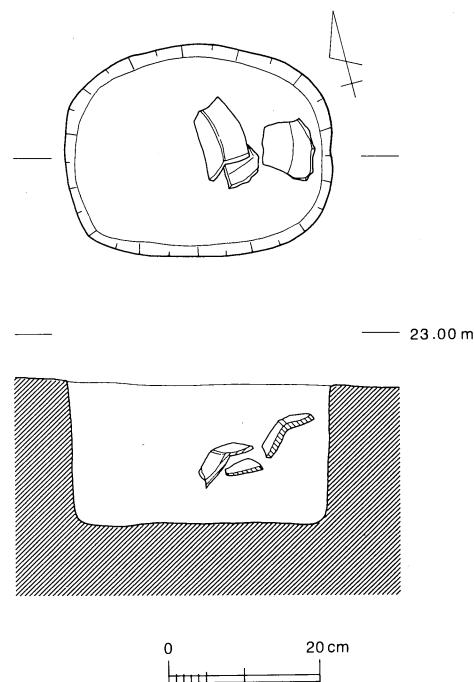
4. 柵

S A 01

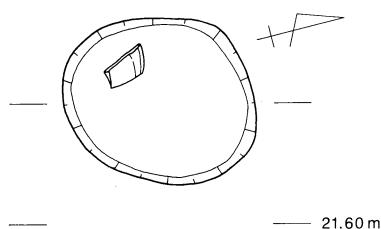
E 12に位置し、ほぼ南北に並んでいるピット列である。8基のピットから成るが、全てが柵列の杭になるかどうか不明である。しかし、近接しているピットを省くと5間になろうかと思われる。柱間は、北から0.8m、1.1m、0.6m、1.4m、1.1mを測り、全長5.0mを測る。対応するピットが認められないため、柵列と考えたが、どの建物に対するものかは断定しがたい。主軸方向と位置からS B 04に伴う遺構と考えるのが妥当であろうか。

S A 02

S B 06の北辺に接して東西方向に伸びる柵である。全長9.0mを測り、6基のピットがあり、5間の柵列となる。柱間は西から2.1m、1.2m、2.1m、2.2m、1.4mを測る。東端がS B 06の東辺と同じで、北辺と0.25mと近くして築かれている。
(渡辺)



第25図 ピット23 実測図



第26図 ピット36 実測図

S A03

S B08・S B09とS B10からS B12との間に南北に走る柵列で7間分検出した。総長12.5mであるが、わずかに曲線を描き柱間も等間ではない。

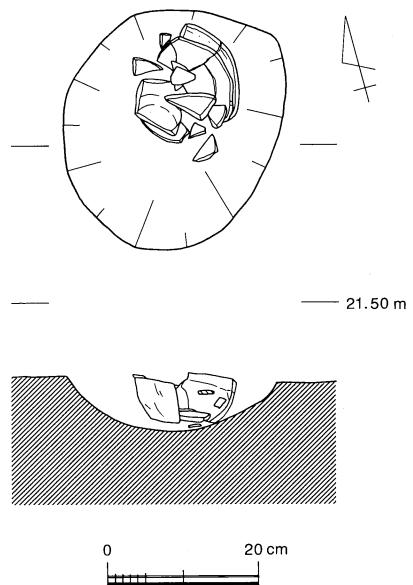
S A04

S B10・S B12の西側を南北に走る柵列で4間分検出した。S B11と重複関係にある。総長9.1mで、約2~2.4mの柱間を持つ。

S A05

S B10からS B12の南側で検出、東西に走る柵列で3間分検出した。総長6.6mで、約2~2.2mの柱間を持つ。

S A04とS A05はその位置関係から関連する遺構と考えられる。



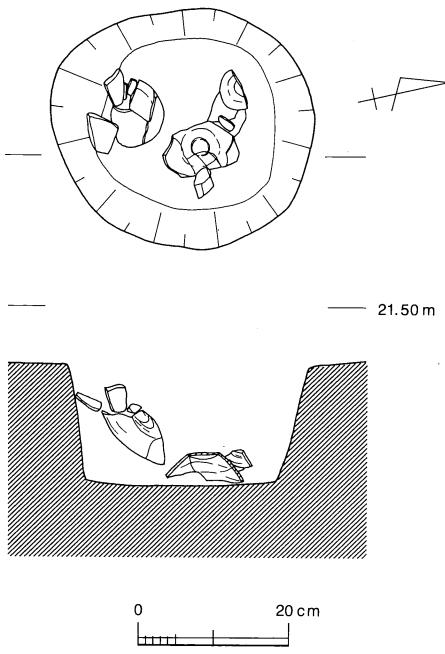
第27図 ピット62 実測図

5. その他の遺構

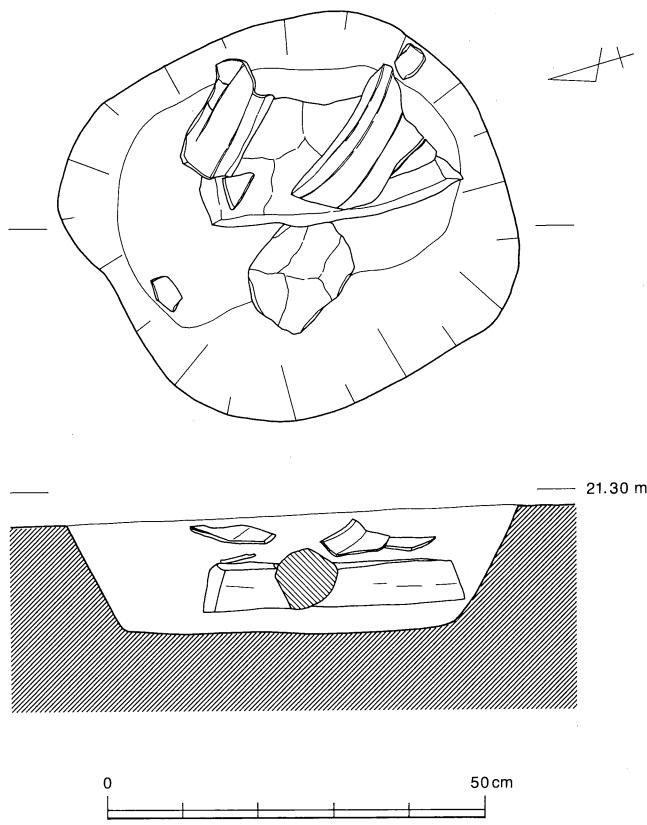
この他にもS A08・S A09・S A10と言った柱間約2~2.2mの2本対の施設をS B10からS B12の建物群の北・西および南側で検出しておらず、S B10の北及び西側で検出したような目隠し塀或いは門のような建物を取り囲む施設の一部と考えている。

これらの建物跡・溝・柱穴からは殆ど遺物が出土していないか、出土していても細片であることが多かった。しかしながら調査区の東半において、いくつかの柱穴からある程度纏まった状態で遺物が出土しており、意図的に埋められたと思われる状況が観察された。

P-23はS A04を構成する柱穴の一つで直径約40×27cmの楕円形を呈しており、深さは約17cmである。土師器鍋片が柱穴東半に立った状態で出土している。



第28図 ピット63 実測図



第29図 ピット97 実測図

P-36はSB10を構成する柱穴の一つで、直径約20.5cm、深さ約5cmを測る。白磁碗片が横向きに立った状態で出土している。

P-62・P-63は建物を構成する柱穴ではない。

P-62は直径約30cm、深さ約7cmを測る。浅い皿状のピットで土師器壠が上向けの状態で出土している。P-63は直径約40cm、深さ約15cmを測る。土師器壠が3個体下向きに伏せた状態で出土している。

これらの柱穴で前二者（P-23・P-36）と後二者（P-62・P-63）とでは、建物を構成するか否か、土器が完形か否かの違いがあり、各々のもつ意味合いが異なってくるものと考えられる。（別府）

IV. 出 土 遺 物

中後瀬遺跡での出土遺物は量的には少量で、又ピット内或いは溝などの遺構に伴う出土状況を示すものも少ない。大半は、遺構面上に堆積するIII、IV層包含層より出土しており、いわゆる二次堆積と考えられる出土状況を呈する。従ってここでは、出土遺物を遺構の時期決定に必要な遺構に伴うものと、包含層中より出土したものとに分け、それについて、その概要を述べたい。

1. 遺構に伴う遺物

中後瀬遺跡で、遺物を出土した遺構には、SD01・03及びピット群がある。

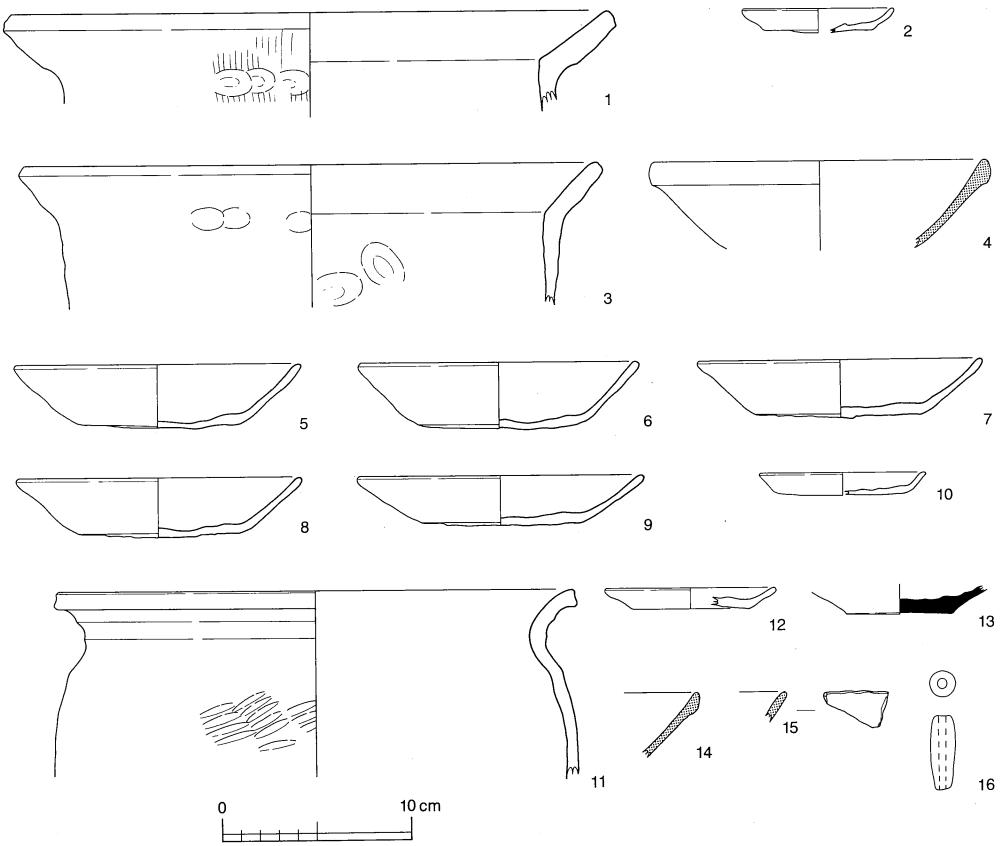
①ピット内出土遺物

各ピット内からは、土師器、須恵器、船載磁器等の出土が見られるが、その大部分は細片で、図化したものは僅か16点に過ぎない。ここでは、図化したものについて若干の説明を加えることにする。

ピット23からは、土師器の堀が2点出土している。1は口縁部が大きく、「く」の字状に外反する堀である。粘土紐巻き上げ成形の後、内外面共タタキ調整を加え、さらに口縁部外面及び内面はヨコナデ調整し、外面には粗いハケ調整を加える。口縁部外面には指頭圧痕が認められる。3も1と同様の形態を呈する堀である。調整技法も1とほぼ同一であるが、体部外面のハケ調整は認められない。

4はピット36より出土した白磁碗である。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は玉縁状に成形する。内外面共施釉されるが、外面の体部下半以下は露胎である。色調は灰色を帶びた白色を呈し、器面には、気泡及び釉垂れが認められる。2はピット54より出土した土師器皿である。平底で体部は斜め上方に立ち上がる。ロクロナデ調整の後内外面共ロクロケズリを加え、さらに内面の底部及び体部にナデ調整を加える。底部外面は未調整で、ロクロからの切り離し技法はヘラ切りである。

ピット62からは土師器皿が3点出土している。(5・6・7)。3点共、基本的にはほぼ同一の形態を呈し、平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。調整技法も同様で、ロクロナデの後、内外面共ロクロケズリを加え、さらに口縁部外面及び底部内面にナデ調整を加える。底部外面は未調整で、ロクロからの切り離し技法はいづれもヘラ切りである。ピット63からは、土師器皿が2点出土している。(8・9)いづれも平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。調整技法も同様で、ロクロナデの後、内外面共ロクロケズリを加え、さらに口縁部外面、及び底部内面にナデ調整を加える。底部外面は未調整でロクロからの切り離



第30図 中後瀬遺跡ピット内出土遺物実測図

し技法はヘラ切りである。

ピット95からは土師器皿、須恵器塊、白磁碗・皿(?)及び土錘が出土している。

13は須恵器塊の底部である。底部は平底で、底部と体部の界を若干平底高台風に成形している。調整技法は、ロクロナデの後、ロクロケズリを加え、さらに底部内面にナデ調整を加える。高台部及び底部外面の再調整は加えられておらず、ロクロからの切り離し技法は糸切りである。

12は土師器皿である。平底で体部は斜め上方に立ち上がる。調整技法は、ロクロナデの後内外面共ロクロケズリを加え、さらに口縁部内外面及び底部内面にナデ調整を加える。底部外面は未調整でロクロからの切り離し技法はヘラ切りである。15は白磁の皿もしくは碗の口縁部である。口縁部は輪花状に成形される。色調は灰色を帯びた白色に発色する。14は白磁碗である。口縁部は玉縁状に成形され、外面の口縁部下端には1条の凹線が認められる。色調は灰色を帯びる白色に発色し、器面には気泡が認められる。形態及び調整技法の特徴から

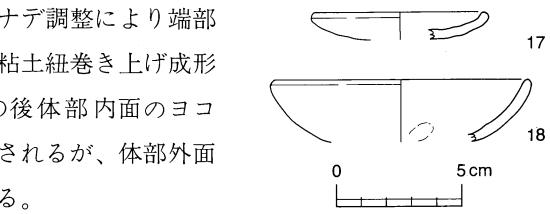
横田・森田分類白磁碗IV類に相当するものと考えられる。16は土錐である。手づくね成形の後、外面にはナデ調整が加えられている。

11はピット97より出土した土師器壠である。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は大きく「く」の字状に屈曲する。口縁端部はナデ調整により端部が垂下する形態を有する。調整技法は、粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にタタキが施される。その後体部内面のヨコナデ、口縁部内外面のヨコナデ調整が施されるが、体部外面は未調整で、斜方向の平行タタキ目が残る。

② S D01出土遺物

S D01からは、土師器皿及び羽釜形土器が出土している。

17・18は、いづれも手づくね成形による土師器皿である。いづれもロクロ土師器に比べてやや厚手に成形され、口縁端部は丸味を帯びる。内外面ともヨコナデ調整が加えられるが、17の体部外面、18の底部内面にはそれぞれ指頭圧痕が認められる。19は土師器の羽

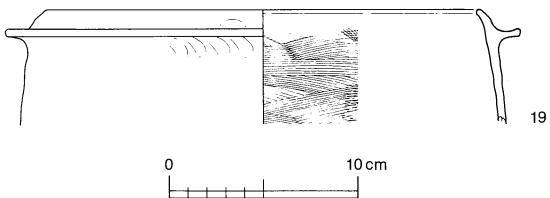


第31図 S D01 出土遺物(1)

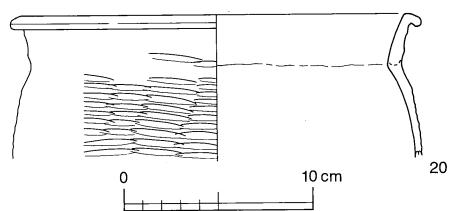
釜型土器である。体部は直立し、口縁部はやや内傾する。体部上部に幅の広い鍔が貼付されている。調整技法は、粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にタタキが加えられる。さらに内面にはハケ目調整が、外面は鍔の貼付が行われた後、貼付部に強いヨコナデが加えられる。その後、口縁部外面には再調整が加えられるが、体部外面は調整が不完全で、指頭圧痕が残る。

③ S D03出土遺物

20はS D03より出土した土師器壠である。体部はやや内彎するが頸部はほぼ直立する。口縁端部は外方に折り曲げられ、端部上面は水平に成形される。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にはタタキ調整が加えられ、さらに内面のヨコナデ、口縁部内外面の強いヨコナデが施される。体部外面は未調整で平行タタキ目が認められる。



第32図 S D01 出土遺物(2)



第33図 S D03 出土遺物

2. 包含層中出土遺物

遺構面に堆積するIII層暗灰色土、IV層灰褐色土中からは、土師器、須恵器、舶載磁器、石製品等の遺物が出土している。

①土師器

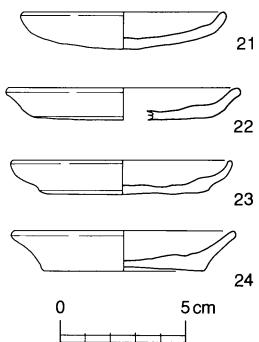
土師器には皿、堀、羽釜、壺、塊が含まれる。

皿

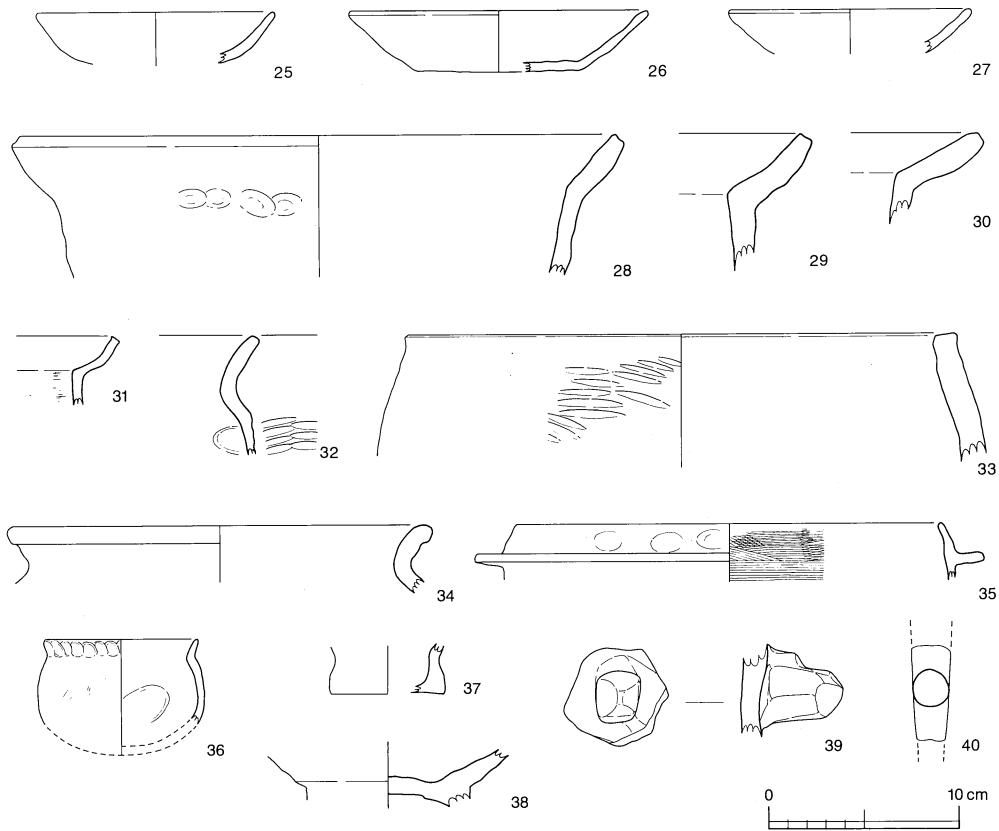
皿は、ロクロ使用のもの（22・23・24・26）と、ロクロ未使用のもの（21・25）とに分類される。ロクロ使用のものは全て、底部内面、口縁部内外面の再調整以外は未調整でロクロからの切り離し技法はヘラ切りである。ロクロ未使用のものは、ロクロ使用のものに比べてやや厚手に成形され、内・外面共ヨコナデ調整が施される。

堀

堀は口縁部を外反させ内外面をヨコナデ調整しタタキ目を消すもの（28・29・30）、口縁部を外反させ外面には縦方向の、内面には横方向のハケ目調整を残すもの（31）、口縁部を外反



第34図 土師器 実測図(1)



第35図 土師器 実測図(2)

させ、再調整は口縁部内外面のヨコナデのみで、体部外面には平行タタキ目を残すもの（32）、口縁部をやや外反させ、端部は折り曲げて玉縁状に成形するもの（34）、体部はやや内傾気味に立ち上がり、口縁端部は水平に切り、体部外面には一部不定方向のタタキ目を残すもの（33）などがある。

羽釜形土器

35は口縁部がやや内傾し、体部上部に幅の広い鍔を持つ羽釜形土器である。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にナデ調整を加える。さらに内面には横方向のハケ目調整が、外面には鍔の貼付が行われ、接合部のヨコナデ調整が加えられている。

壺

36は体部が内彎し、口縁部は外反する壺である。底部は残存していないが、おそらく丸底になるものと考えられる。調整技法は手づくね成形の後、内外面共ナデ調整を加え、最終的に体部外面に粗いハケ調整を加える。

壺

37・38は共に底部のみの残存の為、明確には復原しえないが、37は壺形土器の底部、38は貼付の輪高台をもつ壺もしくは鉢形土器の底部と考えられる。

その他の土師器

39は手づくね成形で、外面をヘラで面トリするもので、壠もしくは甕形土器の把手と考えられる。40は棒状に成形し、外面にナデ調整を施す土製品である。形態から考えて、恐らく三脚付壠（鼎脚壠）の脚部と考えられる。

②須 恵 器

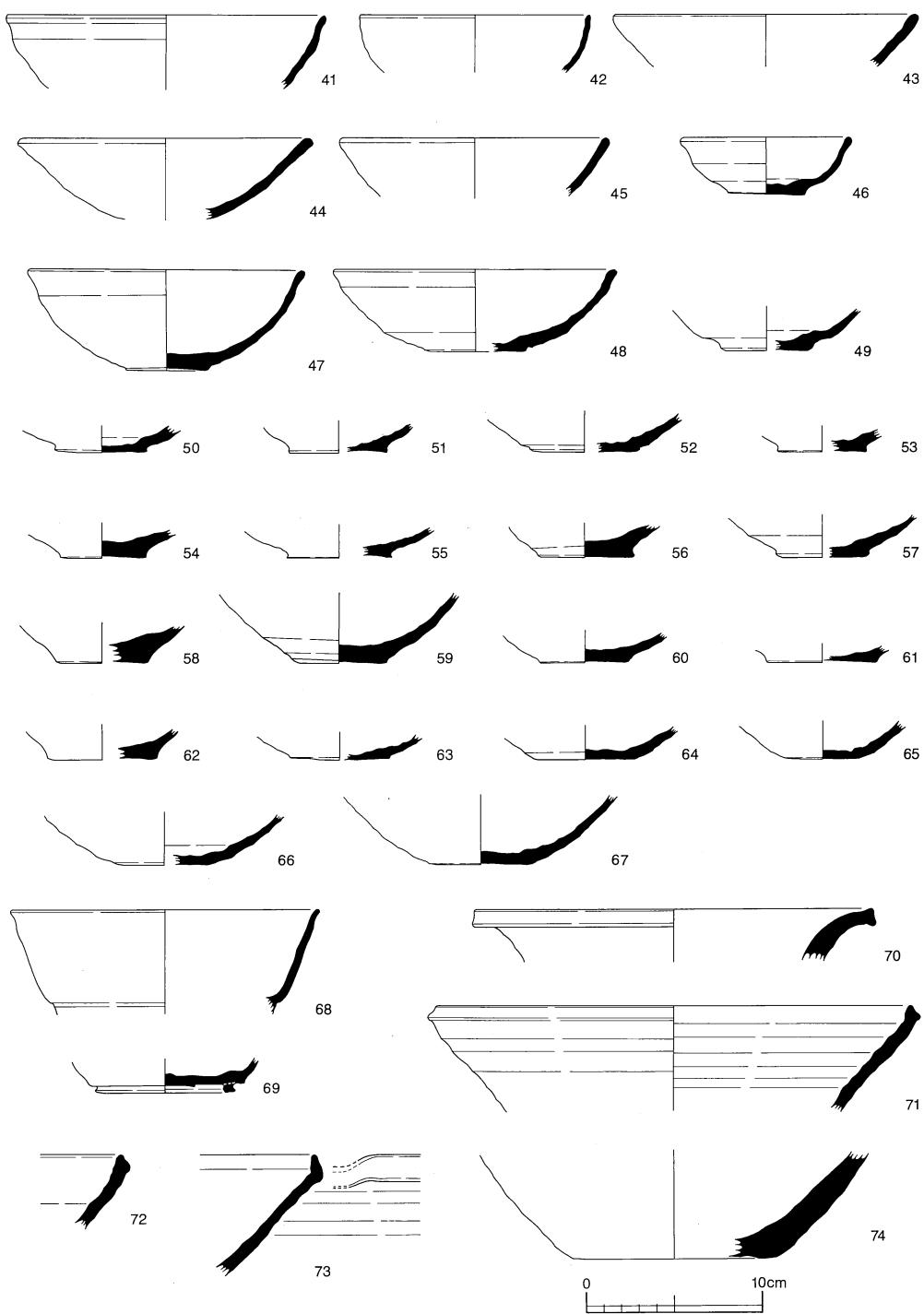
須恵器には壺、甕、鉢がある。

壺

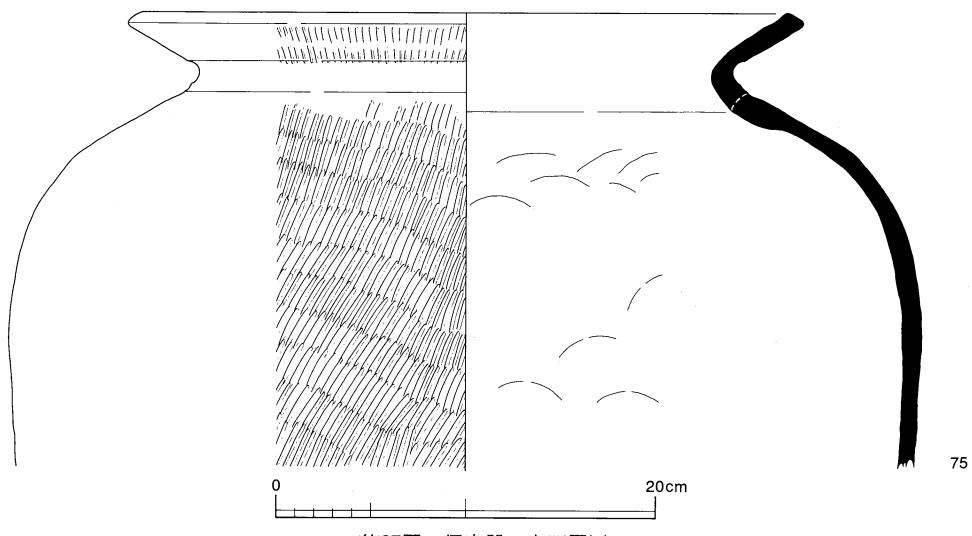
壺は、量的には須恵器の中では最も多量に出土している。底部の形態から見ると、高台をもつものと、高台をもたないもの（64～67）に大別される。高台をもつものは、貼付けの輪高台をもつもの（69）と、平底高台をもつもの（48～63）とに分類される。

平底高台をもつもの、無高台のものはいづれも、ロクロナデ調整の後、内外面のケズリを施す。再調整は内面及び口縁部内外面には施されるが、底部外面は未調整である。底部の切り離し技法は糸切りである。

形態的には口縁部から底部まで残存するものが少なく、明確にはなしえないが、平底高台をもつものは、口径に対して器高が比較的高く、体部はやや内彎気味に立ち上がる傾向が認められ、又無高台のものは、口径に対して器高が低く、体部は直線的に立ち上がる傾向を示す。



第36図 須恵器 実測図(Ⅰ)



第37図 須恵器 実測図(2)

甕

甕は2点出土している。70は口縁部が外反し、強いヨコナデによって端部を垂下させる甕である。75はやや内弯する体部に口縁部が大きく「く」の字状に屈曲する甕である。調整技法は、粘土紐巻き上げ成形の後、タタキ調整が施される。内面のタタキ目はナデ調整によって消されているが、外面は体部と口縁部の界、則ち接着部が強いヨコナデによって再調整されている以外未調整で、口縁部外面にまで縦方向のタタキ目が残されている。

鉢

鉢は口縁部が3点(71～73)と、底部が1点(74)の計4点出土している。口縁部はその形態から口縁端部を斜め方向に切るもの(72)、口縁端部を上方につまみ上げて拡張するもの(73)、上下に拡張するもの(71)とがある。

③舶載磁器

舶載磁器は図化したものだけで14点を数えるが、青磁が3点含まれる他は全て白磁である。

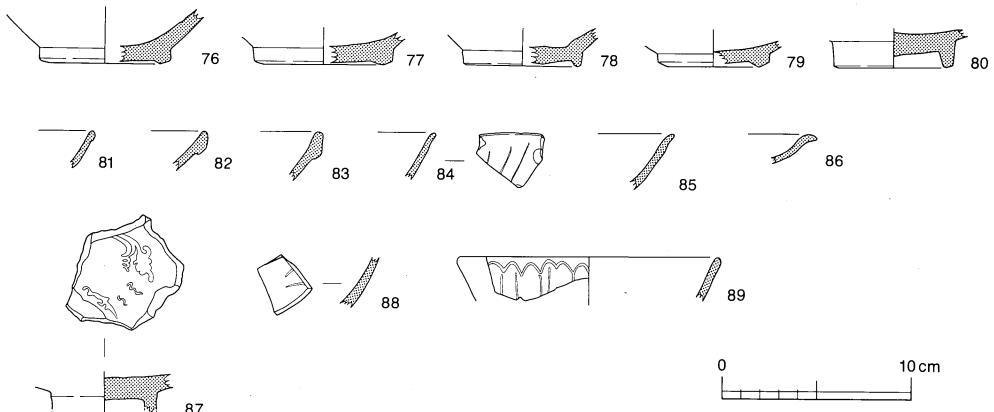
白 磁

白磁は全て破片で全体の器形が分るものはないが、碗と皿が含まれる。

碗

76～80は白磁碗の底部である。76～79はいづれも幅広で、削り出しが浅く、器肉の厚い高台を有する。76は底部内面に1条の沈線を有し、78は底部内面を凹ませて段をもつ。

施釉は内面のみで外面は露胎である。色調は77がやや黄色味を帯びた白色に発色する以外はいづれも灰色を帯びた白色に発色する。80は比較的幅広で低い高台を有する。底部内面に



第38図 船載磁器 実測図

は1条の凹線を廻らす。施釉は内面のみで外面は露胎である。色調は灰色を帯びる白色を呈する。81~85は白磁碗の口縁部である。形態から口縁部を玉縁状に肥厚させるもの(81・82・83)、直立するもの(84)、外反させるもの(85)がある。84は外面にクシ描きで施文されている。内外面共施釉され、色調はいづれも灰色を帯びた白色を呈する。

形態及び技法上の特徴から考えて、76~79は、横田・森田分類白磁碗IV-1類に、80はVII類に、82・83はIV類に、81はII類あるいはIII類に、84はV-2-b類に、85はV-1類にそれぞれ相当するものと考えられる。
^{文献1}

三

皿で図化したものは1点である(86)。口縁部が外反するもので、内外面とも施釉する。色調は灰色を帯びた白色を呈する。口縁部のみの残存で詳細は解らないが、白磁皿IV類に類似するタイプのものである。

青 磁

青磁は碗の細片が3点出土している。

87は底部内面に割花文を施す碗の底部である。内外面共施釉するが底部外面(高台裏)は露胎である。色調は暗黄緑色に発色する。88も同様に内面に割花文を施文する碗の破片である。色調は暗黄緑色を呈する。89は外面に線描きの細蓮弁文を施文する青磁碗である。色調は淡黄緑色を呈し、器面には細かい貫入が認められる。形態及び技法上の特徴から考えて、87・88は龍泉窯系青磁割花文碗。^{文献2} 89は上田分類青磁碗B-IV類に相当するものと考えられる。

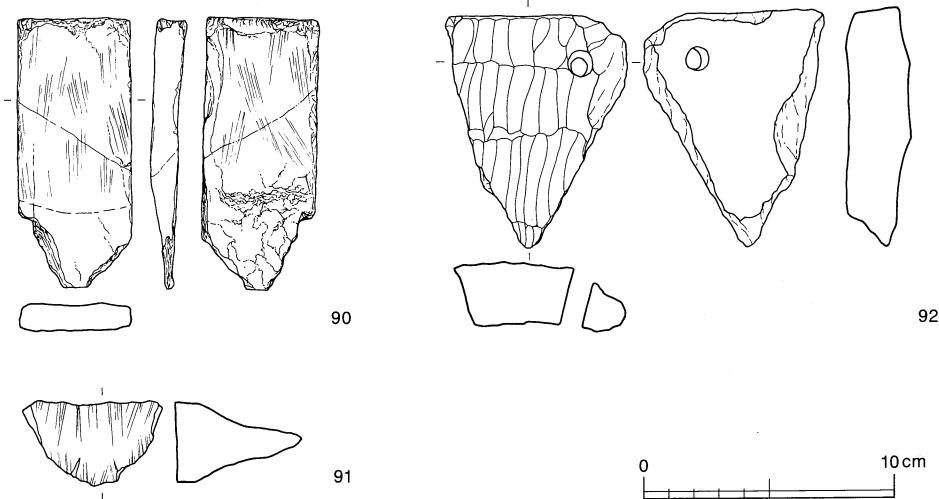
(岡田)

4. 石製品

中後瀬遺跡から石製品は少量しか出土していない。図化したものは3点である。砥石が2点（90・91）と石鍋を転用した温石が1点（92）である。他にチャートや粘板岩は少量出土しているが、使用痕が見られず明らかに石器と考えられないことから図化していない。粘板岩は質の細かいもので、砥石にすれば仕上げ砥になるものであろう。3点をはじめ、他の石材も全て遺構には伴わず上層から出土している。

90は青黒色をした粘板岩製の砥石で、完存ではなく1面を欠いている。残存長10.8cmで幅4.6cm、厚さ1.0cmを測る。厚みがないことから長大な砥石にはならないであろう。残存端部が薄くなっていることから、あと僅かで端部に至る可能性が高い。局部的に凹凸があることから、ある程度の頻度で使用された砥石と考えられる。全体の3分の1前後は擦痕が見られず使用されていないことが判る。自然面を残している。また上面にした際の周辺部も同様で使われていない。側面は3面とも平滑で調整されているか、砥石として使われたものと思われる。断面で凹面となる方がより多く使われている。確認調査で出土したもので、3グリッドから出土しており、遺構面がなかった全面調査を実施していない埋土から出土している。重量は110gである。

91も砥石で、厚みのある大形のもので破片である。擦痕の残る研磨面は1面だけで、最も広い面を残している。他は後の欠損を受けた面で、断面三角形を呈する。石材は90に比べて緻密で、凝灰岩質である。質も柔かく仕上げ砥もしくは中砥と思われる。擦痕は複数方向に見られる。上面（研磨面）に煤が付着している。遺構面上層からの出土で、重さ72gを測る。



第39図 石製品 實測図

研磨面の残存値は5.2cmを最大とし、残存する厚みは5.0cmを測る。

92は滑石製品で、石鍋を転用した温石である。石鍋として数値を復原すると、直径28.0cm前後の鍋となる口縁部を6cm残す小片である。残存高9.3cmで、口縁端面はやや丸味のある角の取れた方形で、内傾するタイプである。突帯は付いておらず、端面から内面に幅1.2cmの面を取っている。内面は丁寧に平滑にしているが、外面はノミの痕跡が明瞭である。幅1cm前後のノミで長さは2.8cm以上で数回重ねて整形している。石鍋の破片に円孔を穿って再利用した製品と考えている。口縁端部から1.5cm下方に径1.0cmの円孔をあけている。片側（推定すると外面の方が径が大きいことから外側）から穿孔している。外面には焼成を受けたことが明瞭で、煤も付着している。石材は長崎県西彼杵半島の滑石と思われる。現重量244g。

（渡辺）



第40図 中後瀬遺跡の現状（1988.1）

第1表 中後瀬遺跡出土遺物観察表

No.	出土遺構	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高			
1	P-23	土師器	壺	(31.4)	(5.3)	口縁部大きく外反	粘土紐巻き上げ成形、口縁部内外面にヨコナデ及び体部外面に粗いハケ目調整、口縁部外面に指頭圧痕	外面に煤付着
2	P-54	土師器	皿	(7.8)	1.3	平底、体部は斜め上方に立ち上がる	内外面ロクロナデ調整、底部外面未調整(ヘラ切り痕)	
3	P-23	土師器	壺	(30.2)	(7.5)	口縁部外反	内外面ともヨコナデ調整、外面に指頭圧痕	
4	P-36	白磁	碗	(17.3)	(4.6)	口縁部玉縁状に成形、体部は直線的に立ち上がる	ロクロケズリの後ロクロナデ調整(口縁部外面のヨコナデ)施釉(灰色を帯びた白色に発色)	器面に気泡、体部外面釉垂れ、白磁碗IV類
5	P-62	土師器	皿	14.9	3.45	平底、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる、口縁端部は丸味を帯びる	内外面ともロクロナデ調整底部外面未調整(ヘラ切り痕)	
6	P-62	土師器	皿	14.5	3.6	平底、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる、口縁端部は丸味を帯びる	ロクロナデ調整、底部内面はヨコナデ、底部外面一部未調整(ヘラ切り痕)	
7	P-62	土師器	皿	14.85	3.15	平底、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる、口縁端部は丸味を帯びる	ロクロナデ調整、底部外面未調整(ヘラ切り痕及び直線状の圧痕)	
8	P-63	土師器	皿	14.7	3.2	平底、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる、口縁端部は丸味を帯びる	ロクロナデ調整、底部内面ヨコナデ、底部外面未調整(ヘラ切り痕)	
9	P-63	土師器	皿	(14.9)	2.65	平底、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる、口縁端部は丸味を帯びる	ロクロナデ調整、底部外面未調整(ヘラ切り痕)	
10	P-87	土師器	皿	(8.8)	1.2	平底、体部は斜め上方に立ち上がる	ロクロナデ調整、底部内面ヨコナデ、底部外面未調整(ヘラ切り痕)	
11	P-97	土師器	壺	(27.0)	(10.0)	口縁部外反	粘土紐巻き上げ成形、内面及び口縁部内外面ヨコナデ、体部外面未調整(斜め方向のタタキ目)	

No.	出土遺構	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高			
12	P-99	土師器	皿	(8.8)	1.1	平底、体部は斜め上方に立ち上がる	ロクロナデ調整、底部外面未調整（ヘラ切り痕）	
13	P-95	須恵器	塊	底径 (5.65)	(1.5)	平底、底部平底 高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
14	P-95	白磁	碗			口縁部玉縁状に成形、口縁部下端に凹線	ロクロナデ調整（口縁部内外面ヨコナデ）施釉（灰色を帯びた白色に発色）	器面に気泡、白磁碗IV類
15	P-95	白磁	皿？			口縁部輪花状に成形	ロクロナデ調整、施釉（灰色を帯びた白色に発色）	
16	P-95	土製品	土錘				外面ナデ	
17	S D01	土師器	皿	(6.7)	1.1	口縁端部丸味を帯びる	手づくね成形、内外面ヨコナデ、外面に指頭圧痕	
18	S D01	土師器	皿	(10.1)	(2.5)	体部は内彎気味に立ち上がる、口縁端部丸味を帯びる	手づくね成形、内外面ヨコナデ、底部内面に指頭圧痕	
19	S D01	土師器	羽釜	(26.4)	(6.0)	体部は直立する口縁部や内傾 体部上面に幅広の鍔貼付	粘土紐巻き上げ成形、内面ハケ調整、口縁部内外面及び鍔貼付部ヨコナデ、体部外面未調整（指頭圧痕）	体部外面煤付着
20	S D03	土師器	堀	(20.6)	(7.55)	頸部直立、口縁端部外方に折り曲げ、口縁端部上面水平に成形	粘土紐巻き上げ成形、口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ 体部外面未調整（平行タタキ目）	体部外面煤付着
21	試掘トレンチ	土師器	皿	(4.0)	1.5	平底	手づくね成形、内外面ヨコナデ	
22	調査区東側 III層暗灰色土	土師器	皿	(9.2)	1.3	平底、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる	ロクロナデ調整、底部外面未調整（ヘラ切り痕）	
23	表採	土師器	皿	(8.7)	1.4	平底、体部はやや内彎気味に立ち上がる、口縁端部尖り気味	ロクロナデ調整、底部外面未調整（ヘラ切り痕及び直線状の圧痕）	
24	調査区南側 III層暗灰色土	土師器	皿	(7.8)	1.6	平底、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる、口縁端部は丸味を帯びる	ロクロナデ調整、底部外面未調整（ヘラ切り痕）	
25	B区IV層灰褐色土	土師器	皿	(12.4)	(2.7)	口縁端部は丸味を帯びる	手づくね成形、内外面ヨコナデ	

No.	出土遺構	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高			
26	6 G	土師器	皿	(15.5)	3.25	平底、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる	ロクロナデ調整、底部外面未調整(ヘラ切り痕)	
27	調査区東側 III層暗灰色土	土師器	皿	(12.6)	(2.3)	口縁端部は丸味を帯びる	ロクロナデ調整	
28	調査区南側 III層暗灰色土	土師器	壺	(31.3)	(7.4)	口縁部外反	粘土紐巻き上げ成形、内外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕	体部外面煤付着
29	IV層灰褐色土	土師器	壺			口縁部外反、比較的器壁は厚い	粘土紐巻き上げ成形、内外面ヨコナデ、口縁部と体部の界に指頭圧痕	胎土中に砂粒を多く含む
30	IV層灰褐色土	土師器	壺			口縁部外反、比較的器壁は厚い	粘土紐巻き上げ成形、内外面ヨコナデ	
31	調査区北半部 IV層灰褐色土中	土師器	壺			口縁部外反、口縁端部斜め方向に切る、体部は直立	粘土紐巻き上げ成形、外面縦方向、内面横方向のハケ目調整、口縁部内外面ヨコナデ	
32	調査区南側 III層暗灰色土	土師器	壺			口縁部外反	粘土紐巻き上げ成形、内面及び口縁部内外面ヨコナデ、体部外面未調整(平行タタキ目)	
33	調査区南側 III層暗灰色土	土師器	壺	(28.6)	(6.8)	体部やや内傾、口縁端部水平に成形	粘土紐巻き上げ成形、内面及び口縁部内外面のヨコナデ体部外面未調整(不定方向のタタキ目)	
34	IV層灰褐色土	土師器	壺	(21.6)	(3.6)	口縁部やや外反 口縁端部外方に折り曲げ、玉縁状に肥厚	粘土紐巻き上げ成形、内外面ヨコナデ(口縁端部強くヨコナデ)	
35	調査区東側 III層暗灰色土	土師器	羽釜	(22.2)	3.05	口縁部若干内傾幅の広い鍔をもつ	粘土紐巻き上げ成形、内外面ヨコナデの後内面ハケ目調整及び鍔の貼付部ヨコナデ、口縁部外面に指頭圧痕	
36	表採	土師器	小壺	(8.0)	(4.5)	口縁部外反、体部内彎	手づくね成形、外面ハケ目調整	古墳時代?
37	B区IV層灰褐色土	土師器	碗?	底径 (5.9)	(2.7)	平底、体部直立、残存部上端は外反	手づくね成形の後ヨコナデ調整	
38	遺構面上層	土師器	碗?			平底高台風に成形、底部外面を深く削る	ロクロナデ調整、底部外面のケズリ	
39	調査区南側 III層暗灰色土	土製品	把手				手づくね成形	甕もしくは壺の把手
40	9 G	土製品	獸足?			棒状	手づくね成形、外面ナデ	器面の剥離が著しい

No.	出土遺構	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高			
41	調査区西側 IV層灰褐色土	須恵器	塊	(18.0)	(4.2)	口縁部若干外反	ロクロナデ調整（口縁部外面強くヨコナデ）	口縁部外面黒く 灰被り（重ね焼 痕）
42	調査区南側 IV層灰褐色土	須恵器	塊	(13.0)	(3.3)	薄手に成形、口 縁端部尖り気味	ロクロナデ調整	
43	B区IV層灰 褐色土 (遺構面検出中)	須恵器	塊	(15.0)	(3.3)	口縁端部丸味を 帯びる	ロクロナデ調整	口縁部外面黒く 灰被り（重ね焼 痕）
44	8 G	須恵器	塊	(16.0)	(4.6)	体部直線的に斜 め上方に立ち上 がる	ロクロナデ調整（口縁部内外 面強くヨコナデ）底部外面未 調整（糸切り痕）	口縁部外面やや 黒ずむ（重ね焼 痕）
45	B区IV層灰 褐色土	須恵器	塊	(17.1)	(3.0)	口縁端部丸味を 帯びる、やや器 壁が厚い	ロクロナデ調整	
46	調査区南側 III層暗灰色土	須恵器	塊	(9.4)	3.3	平底、体部は内 彎気味に立ち上 がる、口縁部や や外反、平底高 台風に成形	ロクロナデ調整（口縁部内外 面強くヨコナデ）底部外面未 調整（糸切り痕）	口縁部外面やや 黒ずむ（重ね焼 痕）
47	調査区南側 III層暗灰色土	須恵器	塊	15.4	5.8	平底、体部は内 彎気味に立ち上 がる、口縁部や や外反、若干平 底高台風に成形	ロクロナデ調整（口縁部内外 面強くヨコナデ）底部外面未 調整（糸切り痕）	口縁部外面やや 黒ずむ（重ね焼 痕）
48	調査区南側 III層暗灰色土	須恵器	塊	(15.9)	4.7	平底、体部は直 線的に斜め上方 に立ち上がる、 口縁部外反、若 干平底高台風に 成形	ロクロナデ調整（口縁部内外 面強くヨコナデ）底部外面未 調整（糸切り痕）	口縁部外面やや 黒ずむ（重ね焼 痕）
49	遺構面上層	須恵器	塊	底径 (5.2)	(2.4)	平底、底部内面 に凹部をもつ、 底部は平底高台 風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未 調整（糸切り痕）	
50	調査区南側 III層暗灰色土	須恵器	塊	底径 5.3	(1.6)	平底、底部内面 に凹部をもつ、 底部は若干平底 高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未 調整（糸切り痕）	
51	B区IV層灰 褐色土	須恵器	塊	底径 (5.5)	(1.65)	平底、若干平底 高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未 調整（糸切り痕）	
52	調査区南側 III層暗灰色土	須恵器	塊	底径 (6.0)	(2.2)	平底、底部内面 若干凹部を形成 底部若干平底高 台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未 調整（糸切り痕）	

No.	出土遺構	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高			
53	調査区南側Ⅲ層暗灰色土	須恵器	塊	底径 (5.1)	(1.3)	平底、底部は若干平底高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
54	Ⅳ層灰褐色土	須恵器	塊	底径 4.9	(1.6)	平底、底部は若干平底高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
55	調査区南側Ⅲ層暗灰色土	須恵器	塊	底径 (6.0)	(1.7)	平底、若干平底高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
56	Ⅳ層灰褐色土	須恵器	塊	底径 5.55	(1.8)	平底、底部は若干平底高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
57	調査区南側Ⅲ層暗灰色土	須恵器	塊	底径 (5.3)	(2.3)	平底、底部内面凹部をもつ、底部平底高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
58	調査区西側灰褐色土 遺構面上直上	須恵器	塊	底径 (5.2)	(2.15)	平底、底部平底高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
59	調査区南側暗灰色土	須恵器	塊	底径 (5.45)	(4.05)	平底、体部は若干内彎気味に立ち上がる	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
60	調査区西側灰褐色土 遺構面上直上	須恵器	塊	底径 (5.1)	(1.8)	平底、底部平底高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
61	Ⅳ層灰褐色土	須恵器	塊	底径 (6.2)	(0.95)	平底、底部平底高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
62	調査区南側Ⅲ層暗灰色土	須恵器	塊	底径 (6.3)	(1.7)	底部平底高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
63	調査区南側Ⅳ層灰褐色土	須恵器	塊	底径 (5.9)	(1.5)	平底、若干平底高台風に成形	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
64	Ⅳ層灰褐色土	須恵器	塊	底径 5.7	(1.9)	平底、底部は高台を作り出さない	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
65	B区Ⅳ層灰褐色土	須恵器	塊	底径 (4.2)	(2.2)	平底、底部内面に凹部をもつ	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
66	調査区西側灰褐色土	須恵器	塊	底径 (5.9)	(2.9)	平底	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	
67	遺構面上層	須恵器	塊	底径 (5.8)	(3.9)	平底、底部はほとんど高台部をもたない、体部は直線的に斜め上方にのびる、底部内面に凹部をもつ	ロクロナデ調整、底部外面未調整（糸切り痕）	

No.	出土遺構	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高			
68	IV層灰褐色土	須恵器	壺	(17.4)	(5.95)	体部は直線的に斜め上方に立ち上がる、口縁部はやや外反、輪高台をもつ	ロクロナデ調整（口縁部内外面強くヨコナデ）	
69	IV層灰褐色土	須恵器	壺	底径 6.8	(2.0)	幅広の低い輪高台をもつ	ロクロナデ調整、底部ヘラ切りの後輪高台を貼付け接合部ヨコナデ	
70	調査区西側 IV層灰褐色土	須恵器	甕	(22.4)	(3.0)	口縁部外反、端部は垂下する	ロクロナデ調整（口縁端部強くヨコナデ）	
71	IV層灰褐色土	須恵器	鉢	(26.8)	(6.1)	口縁端部は若干斜め方向につまみ上げる	ロクロナデ調整（口縁部内外面強くヨコナデ）	口縁部外面黒く灰被り（重ね焼痕）
72	調査区西側 灰褐色土 遺構面上直上	須恵器	鉢			口縁端部上方につまみ上げる	ロクロナデ調整（口縁部内外面強くヨコナデ）	外面黒色に変色
73	IV層灰褐色土	須恵器	片口鉢			口縁端部はやや内傾気味につまみ上げる	ロクロナデ調整（口縁部内外面強くヨコナデ）	口縁部外面黒く灰被り（重ね焼痕）
74	調査区西側 灰褐色土	須恵器	鉢	底径 (11.6)	(6.0)	平底、体部斜め上方に立ち上がる	ヨコナデ調整、底部外面未調整	
75	遺構面上層	須恵器	甕	(34.0)	(24.0)	口縁部大きく「く」の字状に外反、体部やや内彎	粘土紐巻き上げ成形、内外面タタキ、内面ナデ調整、外面未調整、縦方向のタタキ目	
76	遺構面上層	白磁	碗	底径 (7.0)		低く削り出した浅く器肉の厚い高台をもつ、底部内面に1条の沈線	ロクロナデ調整、施釉（灰色を帯びた白色に発色）底部外面露胎	白磁碗、IV-1類
77	遺構面上層	白磁	碗	底径 (7.2)		低く削り出した浅く器肉の厚い高台をもつ、	ロクロナデ調整、施釉（灰色を帯びた白色に発色）底部外面露胎	焼成やや軟、釉剥離、白磁碗、IV-1類
78	IV層灰褐色土	白磁	碗	底径 (6.2)		幅広で比較的低い高台、底部内面に1段、段をもつ	ロクロナデ調整、施釉（灰色を帯びた白色に発色）底部外面露胎	器面に細かい貫入、白磁碗IV-1類
79	IV層灰褐色土	白磁	碗	底径 (5.9)		低く削り出した浅く器肉の厚い高台をもつ	ロクロナデ調整、施釉（灰色を帯びた白色に発色）底部外面露胎	白磁碗IV-1類
80	IV層灰褐色土	白磁	碗	底径 6.25		比較的幅広で低い高台をもつ、底部内面に1条の凹線	ロクロナデ調整、施釉（灰色を帯びた白色に発色）	白磁碗VII類？

No.	出土遺構	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高			
81	B区IV層灰褐色土	白 磁	碗?			口縁部玉縁状に成形	ロクロナデ調整（口縁部内外面ヨコナデ）施釉（灰色を帶びた白色に発色）	器面に貫入、白磁碗II・III類
82	B区灰褐色土	白 磁	碗			口縁部玉縁状に成形	ロクロナデ調整（口縁部内外面ヨコナデ）施釉（灰色を帶びた白色に発色）	器面に貫入、白磁碗IV類
83	灰褐色土	白 磁	碗			口縁部玉縁状に成形、口縁部下端に1条の凹線	ロクロナデ調整（口縁部内外面強くヨコナデ）施釉（灰色を帶びた白色に発色）	器面に貫入、白磁碗IV類
84	IV層灰褐色土	白 磁	碗			口縁部直立、体部外面、クシ描き施文	ロクロナデ調整の後外面クシ描き、施釉（灰色を帶びた白色に発色）	器面に気泡、白磁碗類
85	南側IV層暗灰色土	白 磁	碗			口縁部外反	ロクロナデ調整（口縁部内外面ヨコナデ）施釉（灰色を帶びた白色に発色）	外面ロクロ目、白磁碗V類？
86	灰褐色土	白 磁	皿?			口縁部外反	ロクロナデ調整、施釉（灰色を帶びた白色に発色）体部外面下半以下露胎	
87	灰褐色土	青 磁	碗			比較的高い高台底部内面施文	ロクロナデ調整の後底部内面施文、施釉（淡黄緑色に発色）底部外面露胎	
88	灰褐色土	青 磁				内面に劃花文	ロクロナデ調整の後内面に劃花文施文、施釉（暗黄緑色に発色）	龍泉窯系劃花文青磁
89	IV層灰褐色土 遺構面上層	青 磁	碗	(13.5)	(2.35)	体部外面蓮弁文線刻	ロクロナデ調整の後外面に蓮弁文線刻、施釉（淡黄緑色に発色）	器面に貫入、上田分類青磁碗B-IV類

●法量の()は復原径及び残存器高

●白磁の分類は横田・森田分類による

V. 遺構・遺物の検討

1. 遺構の検討

本遺跡は現大津茂川の右岸に位置し、西側は山塊が迫る標高約20mの平地に立地する。調査範囲が限られていたが、東側は氾濫原になるため東西に遺跡が延びる可能性は少ない。遺構はSB06を除いては全て同一面で検出されており、当該地に遺跡が営まれてから廃絶して水田化するまで地形の変化は殆ど見られない。調査地内で検出された遺構には掘立柱建物跡・柵列・溝がある。墓跡などの土壙や井戸跡は一切調査区内では確認されていない。このことはこの遺跡のもつ性格に起因するものかもしれないが、単に地理的な要因つまり遺跡のすぐ側に大津茂川が流れること等によるものかもしれない。ただ一般に中世集落址を調査していると、必ず検出される土壙が存在しないことは、この遺跡の性格を考える上でも意味を持つものと考える。

掘立柱建物跡は全部で12棟検出されたが、SB04・SB05・SB06およびSB10・SB11・SB12がそれぞれ重複していることから、少なくとも3時期にわたって建物が営まれていたことがわかる。掘立柱建物跡の規模は1間×2間から3間×4間までの様々なものが存在するが、梁行き一間の小建物が5棟存在することは一つの特徴として挙げられる。またSB08は他の建物と比べて大きな柱掘り方をもち、礎板・根固め石を持つものが見られ、規模も大きいことが挙げられる。

これらの建物の柱間はA1.5~1.7m・B1.9~2.1m・C2.3m~の三種類に大別できる。Aの短い柱間を持つものは調査区西端のSB04・SB05・SB06に限られており、桁行き・梁行きともこの柱間を使用している。これに対して調査区の東半では建物の主に南北の方向にCの長い柱間を使用しており、Aの短いものは使用していない。このことから柱間の差異は時期差を表すものではなくどうやらSB04・SB05・SB06の一群とSB02およびSB08~SB12の一群とは異なった規格の上に建物が建てられたものと考えてよさそうである。延いてはSB04・SB05・SB06およびSB10・SB11・SB12が建て替えを行っている可能性が高いものと考えられる。次に建物の軸方向の角度を図上北から測ってみると、①N0~3°W・②N4~8°Wの二種類に大別できる。つまり①SB01・SB06・SB09・SB10・SB12、②SB02・SB03・SB04・SB07・SB08・SB11となる。SB05だけは柱通りに歪みがあるため除外した。

個々の柱穴については、SB08の身舎の柱穴が他のものと比べて大きいことが挙げられる。また纏まった状況で遺物が出土している柱穴には根固めと思われるもの(P-23・P36)。

P-97)、地鎮の際の埋納と思われるもの(P-62・P-63)がある。後者は建物の中には無く、位置的には建物群の南西に作られている。

次に柵列および溝について見る。重複関係ではSA02とSB04、SA04とSB11、SD03とSB04、SD04とSB08・SB09が切り合っており同時併存は考えられない。またSD01はSD02を切って作られており、SD02とSD03は同一のものと考えられる。

柵列および溝が生活領域を限るものとし、これらに囲まれた中を一つの屋敷の構えとするならば、SA01とSA02およびSD02によって一つの構えが考えられ、その中に入る建物はSB05～SB07である。またSA03・SA08・SA09・SA10によっても一つの構えが想定でき、それに囲まれる建物はSB11～SB12である。この構えの更に内側にSA03を共用してSA06・SA07に囲まれた建物跡SB10がある。更にまた、同じくSA03を共用してSA04・SA05に囲まれた構えが想定できる。つまりこの遺跡は柵列等で囲まれた建物が2群とそういった区画内に属さない建物群で構成されている。この内、後者が前述したような、梁行き1間の小建物、及び他の建物と比べて大きな柱掘り方をもつ建物であることが挙げられ、両者が違った性格を持つもの、或いは時期差を持つものと考えられる。(別府)

2. 遺物の検討

中後瀬遺跡では出土した遺物には、土師器、須恵器、船載磁器、石製品などがあるが、その出土量は決して豊富であるとは言い難い。さらに、それらの遺物は遺構検出面上に堆積する包含層中より出土したものが大部分で、建物群を構成する柱穴内あるいは、溝等の遺構から検出されたものは非常に少ない。さらに遺構内から出土した遺物も小片が多く、全体を復原し得る物は殆どない。しかしながら、当遺跡で検出された遺構の時期決定にあたっては、遺物の年代観をある程度示す必要がある。

さて当遺跡で検出された遺物の大部分を占めるのは、土師器及び須恵器である。この時期の須恵器については県内では東播系、^{文献3・4・5 文献6・7}西播系のものを中心に研究が進められ、ある程度その実態が明らかになりつつある。

しかし、土師器については、県内各地で多量にかつ普遍的に出土するにも拘らず、未だその編年作業は途上の域を脱していない。特に皿については、その細かい形態差は著しいものの、全体的なプロポーションはほぼ同一の傾向を示し、地域差が大きいこともあって、その編年は著しい立ち遅れを見せている。ただ、土師器壙については、県内各地で出土し、その形態差も大きく、編年研究、集成といった形での発表は行われてはいないものの、報告書等で紹介される例が増加しつつある。

ここでは、上記のような条件を考慮し、土師器壙、須恵器壙について、あえてある程度の型式分類を試み、当遺跡における年代設定を行ってみたい。なお、年代観の決定にあたって

は、種々の問題があるものの、他地域との比較検討により行う事にする。

土 師 器 堀

今回出土した6点の土師器堀は、形態及び調整技法の特徴から以下のように分類出来る。先づ調整技法の差異から、外面のタタキ目をナデ調整によって消すもの（A類）、体部外面は未調整で外面にタタキ目を残すもの（B類）とに分類出来る。A類はさらに、ナデ調整の後、内面もしくは外面にハケ目調整を施すもの（HN-A 1類 1・31）と、ハケ目調整を施さないもの（HN-A 2類 3・28・29・30）に細分される。次にB類は、口縁部の形態上の差異から、口縁部を水平に切るもの（HN-B 1類 33）と、口縁部を外反させるもの（HN-B 2類）とに分類出来る。さらにB 2類は、口縁端部の調整技法の差異から、口縁端部をナデて垂下させるもの（HN-B 2-a類 11）、口縁端部を外方につまみ出すもの（HN-B 2-b類 20）、口縁端部を折り曲げて玉縁状に肥厚させるもの（HN-B 2-c類 34）に細分される。

以上、細分した各類の前後関係について考える。HN-B 2類は、口縁端部の調整技法の差異から、HN-B 2-a類→HN-B 2-b類→HN-B 2-c類もしくは、HN-B 2-c類→HN-B 2-b類→HN-B 2-a類となる。ここで調整技法のあり方から考えると、HN-B 2-a類→HN-B 2-b類→HN-B 2-c類の関係が成立する。次にHN-A類とHN-B類との前後関係を見てみる。土師器堀の形態変化を壺形から堀形への変遷という長いオーダーで考えてみると、8世紀代の古いタイプの壺形土器は内外面とも丁寧に再調整され、ハケ目調整が加えられるのに対し、中世の堀形土器は再調整が不充分で外面のタタキ目が残る傾向にある。このことから、一般的に考えて、HN-A 1類→HN-A 2類→HN-B類の関係が成立する。なお、HN-B 1類とHN-B 2類との前後関係は不明である。

須 惠 器 壺

今回出土した壺あるいは壺と考えられる28点の須恵器は形態及び調整技法の差異から、以下のように分類される。まず底部の形態から、輪高台のもの（SW-A類 69）、平底高台のもの（SW-B類）、平底のもの（SW-C類 64~67）に大別される。さらにSW-B類は、調整技法の差異から底部内面を凹めて、高台部側面に再調整を行わないもの（SW-B 1類 49・50）と底部内面を凹めないで、かつ高台部側面を再調整しないもの（SW-B 2類）とに細分される。次にこれら細分された各類の前後関係について述べると、高台部及び底部の調整のあり方から考えると、SW-A類→SW-B類→SW-C類、もしくはSW-C類→SW-B類→SW-A類の関係が考えられ、再調整のあり方から考えると、SW-A類→SW-B類→SW-C類かつ、SW-A類→SW-B 1類→SW-B 2類→SW-C類の関係が妥当であると考えられる。

次にこれらの遺物の共伴関係から成立した各類型間の前後関係について検証することが必

要であるが、当遺跡では、各類型間の良好な共伴関係を見出しえない。ここでは、次に各地域での類例との比較から各類の時期について考えてみたい。

先ず、SW-A類とした坏については、他地域での類例から8世紀後半～9世紀前半代の時期が想定される。^{文献7} SW-B類については、12世紀中葉～後半にその所属時期が求められる。^{文献3・4} 又SW-C類は、神出もしくは魚住産のものと思われ、13世紀前半の時期が想定される。

又、土師器堀についてみると、HN-B 2-c類は三田市八木ノ谷中世墓に類例が見られ、^{文献8} 13世紀前半の時期が想定されている。又、口縁端部を外方につまみ出すタイプのHN-B 2-b類は、丹波河津館跡に類例が見られ、12世紀中頃～後半の時期が想定されている。^{文献9} 従って、それに先行すると考えられるHN-B 2-a類及び、HN-A類は少なくとも12世紀中葉以前に属するものと考えられる。

次に、単独である程度時期の設定出来る須恵器鉢及び、舶載の磁器類について考える。須恵器鉢類はいづれも東播系の所産と考えられ、72には12世紀後半、71には13世紀後半、73には13世紀中葉の時期がそれぞれ想定される。^{文献3・4} 白磁は森田分類の、IV・V・VI類のものを含み、ほぼ11世紀中葉から13世紀前半迄の時期に所属するものである。^{文献1} 青磁類は割花文のものが、12世紀後半～13世紀前半に、又、細描き蓮弁のものは15世紀後半から16世紀前半の時期に収まる。^{文献2}

以上から、本遺跡出土遺物については、①SW-A類で構成されるI期、即ち8世紀後半～9世紀初頭の時期、②HN-A類及び、HN-B 2-a類で構成されるII期、即ち12世紀中葉以前の時期、③HN-B 2-b類及び、SW-B類で構成されるIII期、即ち12世紀中葉～後半の時期、④HN-B 2-c類及び、SW-C類で構成されるIV期、即ち13世紀前半～中葉の時期、⑤魚住産の口縁端部を上下に拡張させる片口鉢で構成されるV期、即ち13世紀後半～14世紀前半の時期、⑥上田分類青磁碗B-IV類で構成されるVI期、即ち15世紀後半～16世紀前半の時期の6時期に一応区分出来る。しかし、土師器皿、HN-A類、HN-B 1類については、今回は所属時期を明確になしてていない。

(岡田)

VII. まとめ

当遺跡では、遺構の項で述べたように、建物跡が12棟、溝が4条、建物跡に伴うと思われる柵列もしくは門と思われる施設が9基検出されている。

先づ、遺物の検討の結果得られた成果からこれらの各遺構間の先後関係及び所属時期について若干考察を加えてみたい。

遺構検出面上をおおう包含層中より出土した遺物中には、最も新しい時期のものとしてVI期則ち15世紀後半～16世紀前半のものを含んでいる事から、少なくともこの遺構面が完全に埋没するのは16世紀前半代迄下る可能性が考えられる。但し、遺構面全体が同一の包含層でおわかれている可能性は少なく、又、包含層の堆積も同一ではなく、複数の層に細分されることも考えられ、必ずしもこの面が16世紀前半代迄継続使用されていたとは考えにくい。ただ、現在持ち合わせている資料では、遺構面が生活面として使用されていた下限は、一応16世紀代迄下りうる。

次に遺構面上に構築されている各遺構の所属時期であるが、SB04、05、06及びSD01は重複しており、同時には存在しない。同様にSB10、11、12と、SB08、09、SD04も重複関係にあって、同様に同時存在は考えられない。この遺構の重複関係から、各遺構群は少なくとも3時期に区分される時期に所属している事が分る。

次に出土遺物から各遺構間の前後関係をみてみたい。

SB09を構成する6基のピットの内、ピット93、99、108、101からは、細片ではあるが、少量の遺物が検出されている。いづれも細片で図化しえなかつたが、殆どがIII期則ち12世紀中葉～後半代の須恵器碗片である。但し、ピット94から出土した須恵器碗は、全く高台を持たないタイプのものであり、IV期相当則ち、13世紀代前半に属するものと考えられる。

次にSB09の所属時期であるが、これを決定するには、建物跡を構成する柱穴内より出土した遺物の出土状況を検討する必要がある。則ち、建物跡の廃絶した後に流入した土にその遺物が含まれていたと仮定するならば、その遺物の示す年代は、その建物の廃絶時期の上限を示すことになる。又、その遺物が、埋置された形で出土しているか、あるいは、柱を柱穴に固定する際に充填された土に含まれていたと仮定した場合、その遺物の示す年代はその建物の構築時期の上限を示すことになる。しかし埋土中に含まれる遺物が、廃絶後の流入中に含まれていたのか、構築時の埋土に含まれていたのかを区別するのは困難で、今回の調査では明確に区別しえていない。ここでは、明瞭に柱穴内で埋置されていたと考えられるもの以外は、廃絶後に流入したと考えて、記述をすすめる事にする。

以上の前提に立って考えると、SB09はIV期をその廃絶の上限とする建物と考えられる。

第2表 遺構一覧表

	柱間		方 向	所属時期	切り合い
	桁間	梁行			
SB 01	B	B	①		無
SB 02	B	C	②		無
SB 03	B	B	②		無
SB 04	B	B	②		有
SB 05	A	A			有
SB 06	A	A	①		有
SB 07	A	A	②		無
SB 08	B	C	②	IV-1	有
SB 09	B	C	①	IV-2	無
SB 10	C	B	①	IV-1	有
SB 11	C	C	②	III	有
SB 12	C	B	①	III	有
SD 01			②		有
SD 02			②	III	有
SD 03			②	III	有
SD 04			②	III	有
SD 05			②		無
SA 01	A		②		無
SA 02			①		有
SA 03				III	無
SA 04			②	III	有
SA 05		B	②	III	無
SA 06		C	①	IV-1	無
SA 07		B	①	IV-1	有
SA 08		C	①	III	無
SA 09		C	①	III	無
SA 10		B	①	III	無

柱間 A 1.5~1.7m

方向(図上北より)

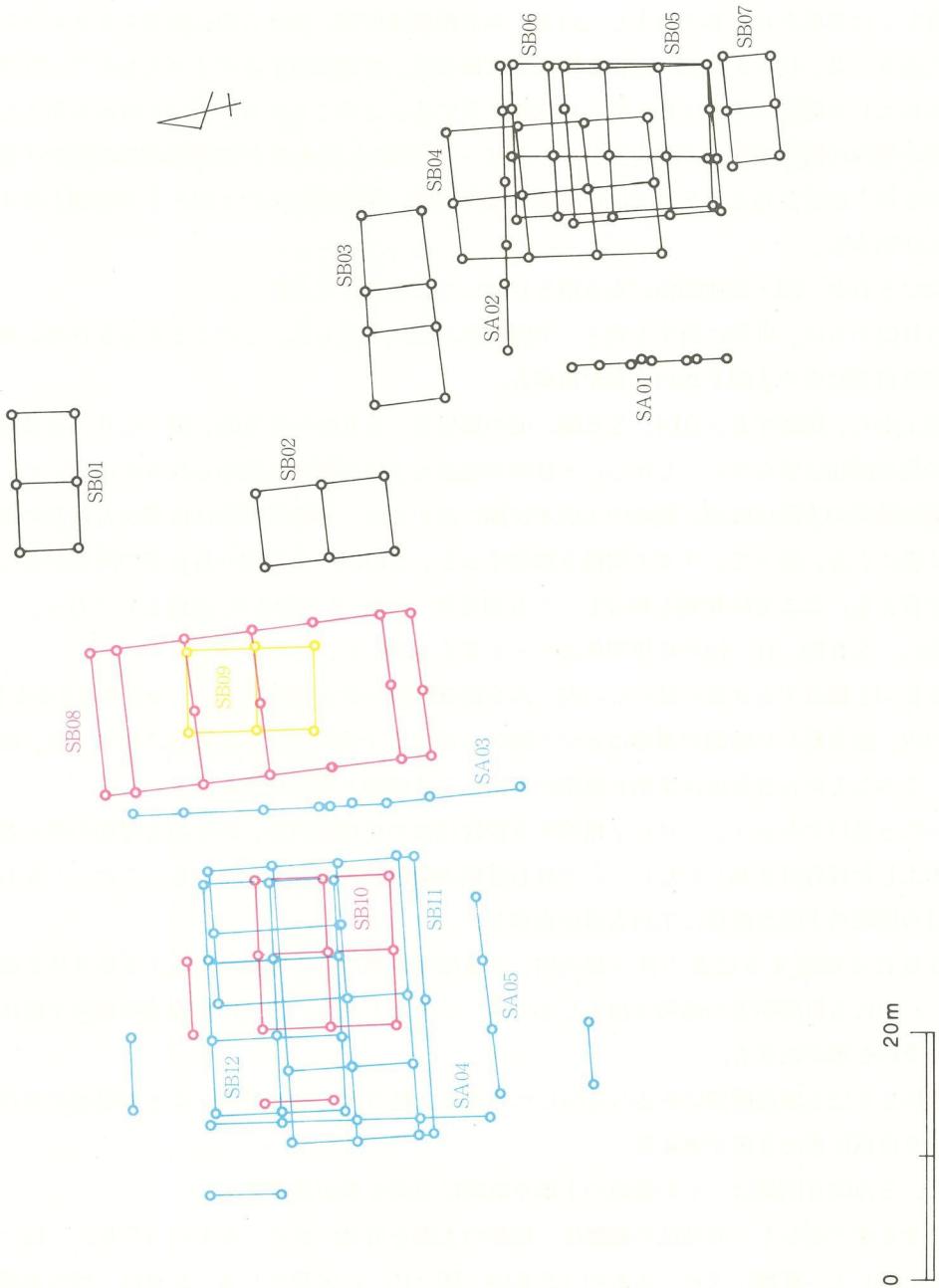
B 1.9~2.1m

① N 0~3°W

C 2.3m~

② N 4~8°W

第41図 建物跡時期別配置図



次に、S B08についてみると、建物跡を構成する14基の柱穴群の内、10基の柱穴から遺物の出土が見られるものの、ある程度時期の解る遺物を出土しているものは7基である。中でもピット97では、土師器壙と須恵器壺が、廃絶後の流入中というよりはむしろ、構築時に遺棄もしくは埋置された形で出土している。須恵器壺はIII期、壙はII期に所属するタイプのものである。又、ピット106から出土した須恵器壺は、IV期に属するタイプのもので、柱穴群から出土した遺物の中では最も新しい様相を呈する。このことから、ピット97から出土した遺物が建物の構築時期の上限を示し、かつピット106出土のものが建物の構築時期の下限を示すものと仮定すると、S B08はIII期を構築の上限、IV期を廃絶の上限とする建物を考えることが出来る。

次にS B08、09と重複関係にある溝S D04について考えてみたい。

S D04からは、III期に属する壙と、土師器皿の出土が見られ、このことからS D04の廃絶時期はIII期にその上限を求める事が出来る。

以上から、重複するS D04、S B08、09の関係は、S D04→S B08、09となり、S B08と09の先後関係は分らない。しかし、S B09が廃絶の上限がIV期に求められるのに対して、S B08は構築の上限はIII期に廃絶の上限がIV期に求められ、存続の時期はIII期からIV期の間という事になる。従って、3者の関係を整理すると、S D04→S B08→S B09の関係が最も妥当と言える。ここではIV期を細分し、S B08をIV-1期、S B09をIV-2期としておく。

次に、S B10、11、12の重複関係について考えてみたい。

S B10を構成する9基の柱穴群の内、ある程度時期の分る遺物を出土したものは6基ある。その内、最も新しい時期の遺物はピット50から出土した須恵器壺でIV期に相当する。従って、このことからS B10はIV期を廃絶の上限とする建物と考えられる。

次にS B11であるが、S B11を構成する合計18基の柱穴群の内、ある程度時期の分る遺物を出土した柱穴は2基しかない。いづれもIII期の須恵器壺が含まれている。このことからS B11の廃絶の上限はIII期に求める事が出来る。

S B12を構成する12基の柱穴群の内、ある程度時期の分る遺物を出土する柱穴は2基あり、いづれもIII期相当の遺物を出土している。このことから、S B12の廃絶時期の上限はIII期に求める事が出来る。

次にS B12と重複関係にあるS A04については、柱穴内の出土遺物からその廃絶の年代の上限をIII期に求める事が出来る。

又、S A03も同様に、その廃絶の上限をIII期に求める事が出来る。

以上をまとめると、西地区の遺構は、廃絶の上限をIII期に求めうるもの（S B11、12、S A03、04）と、IV期に求めうるもの（S B08、09、10）に区分される。S B11、12の前後関係は不明である。

次に、調査区東側で検出された遺構群であるが、東地区では、S D02よりⅢ期に属する土師器壙が出土地した以外、柱穴内よりの明瞭な出土遺物が少なく、それぞれの建物の細かな所属時期を決定することは出来ない。

次に、遺構の検討の成果をふまえてまとめると、第2表のようになる。

ここで、遺構の項で指摘された建物の柱間間隔は、共通の要素をもつSB05と06、SB08と09、SB10・11・12の3つのグループがたがいに切り合った関係にあり、かつ、所在場所が違うことが分る。このことから、柱間間隔の異動はむしろ、時期差を表わすのではなく、建物の性格を反映している事が指摘される。

次に、建物の方向性はどうであろうか。同一の方向性を示すSB09・10・11はそれぞれⅣ-2期、Ⅳ-1期、Ⅲ期に所属し、また方向を異にするSB11・12は、Ⅲ期に所属している。このことから、柱間間隔、方向性の両者とも、建物の時期差を反映しているものではないことが指摘される。

上記のことを前提として、まとめると次のようになる。

Ⅲ期則ち12世紀中葉～後半の時期には、SB11とそれに附隨する塀もしくは門と考えられるSA03、SA08・09・10の施設と、やや規模の小さなSB12とそれに附隨すると思われるSA04・05の付属施設が存在している。両者は互いに重複関係にある為、同時存在は考えられないが、出土遺物からは、前後関係は不明である。

Ⅳ期は建物の重複関係から2時期に区分出来る。Ⅳ-1期則ち13世紀前半の時期には、SB10とその東側にはSB08が存在しており、Ⅲ期とは異なり建物に附隨する柵列などの施設はみられない。

Ⅳ-2期則ち13世紀後半以降の時期には、存在する建物はかなり規模を縮小されたSB09のみが存在する。

このことからⅢ期の時期の建物は周囲に塀などの施設を有するが、Ⅳ期の建物にはそれらの施設は見られないことが指摘される。さらに遺物からは所属時期の明確でない、SA01・02に囲まれる、SB05・06もⅢ期に所属する可能性が考えられる。西側のSB11・12同様、SB05・06の前後関係は不明であるが、少なくとも1度の建て換えが行われている。

次に溝と建物の関係であるが、出土遺物及び、建物との切り合い関係から、少なくとも各溝はⅣ期には廃絶していることは確実である。しかし、Ⅲ期には建物と同時に存在していたのか、廃絶していたのか不明である。ただ、Ⅲ期の建物と溝との関係は、その位置関係から無関係である様に思われる。

次に、建物の性格についてであるが、遺構の規模が比較的小さいこと、それぞれの建物に顕著な規画性が見られないこと、出土遺物にも、土師器、須恵器と若干の舶載磁器など特殊なものが見られないことなどから、官衙、寺院等の特殊な建物は想定できない。敢て言うな

ら、一般の集落跡と考えるべきものであろう。

以上まとめると以下の様になる。

①本遺跡で検出された遺構面では、12棟の掘立柱建物、10基の建物址に伴う付属施設、5本の溝が検出されている。

②遺構面上に堆積する出土遺物から、少なくとも、16世紀前半には生活面としての機能を停止している。ただ、この面が機能を開始する時期は不明である。

③遺構面上に形成される遺構群は、少なくとも12世紀後半を廃絶の上限とするⅢ期所属のものと、13世紀前半を廃絶の上限とするⅣ期所属の2時期に大きく分けられる。又、それぞれの時期は、建物の切り合い関係からさらに2小期に細分される。

④Ⅲ期に所属する建物は、周囲に塀のような付属施設をもち、少なくとも1度の建て換えが行われているが、それぞれの建物の前後関係は不明である。

Ⅳ期は13世紀前半を建物の廃絶の上限とするⅣ-1期と、13世紀前半以降を建物の廃絶の上限とするⅣ-2期に、建物の切り合い関係から区分する事が出来る。

⑤Ⅳ期に属する建物群はⅢ期の建物に見られた付属の施設を持たず、規模を縮小する形で建て替えが行われている。

⑥SB01、SB02、SB03、SB04については、周囲に塀等の付属施設をもたない点で、Ⅲ期の建物とは異なり、むしろⅣ期の建物に類似する。従って、時期的にはⅣ期併行もしくは時期が下る可能性が指摘される。

⑦建物群の性格については、個々の建物の規模が小さいこと、又、出土遺物に特殊なものが見られないことから、官衙、寺院等の性格は想定出来ない。あえて言うなら、一般の集落といった物を想定せざるをえない。

(岡田)

引用・参考文献

1. 横田賢次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について——型式分類と編年を中心として——」『九州歴史資料館論集4』九州歴史資料館
2. 上田 秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
3. 大村 敬通・水口 富夫 1983『魚住古窯群』兵庫県教育委員会
4. 森田 稔 1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要第3号』神戸市立博物館
5. 丹治 康明 1984「東播磨の中世須恵器生産」『第13回中世土器研究集会発表資料』日本中世土器研究会
6. 森内 秀造 1984「相生の古代窯業」『相生市史第1巻』相生市・相生市教育委員会
7. 西口 和彦・森内 秀造 1986『相生市・緑ヶ丘窯址群』兵庫県教育委員会
8. 岡田 章一 1987「八木ノ谷中世墓」『青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告I』兵庫県教育委員会
9. 輔老 拓治・村上 泰樹・村上 賢治他 1987『河津館址』兵庫県教育委員会

〈付載〉相野散布地確認調査結果

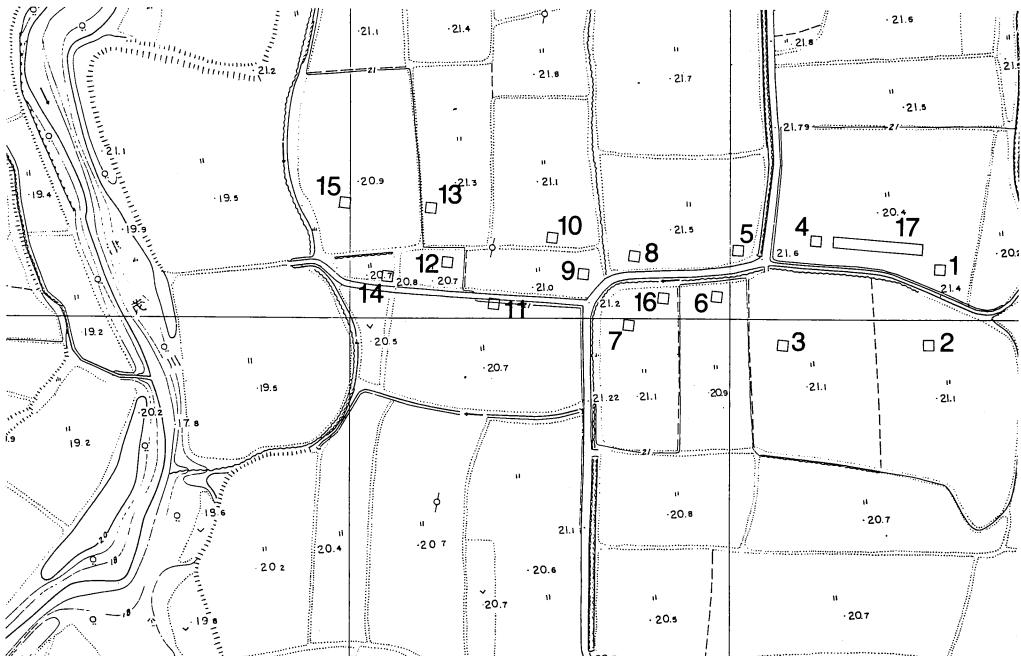
1. 遺 跡 名 相野散布地
2. 所 在 地 姫路市石倉・相野
3. 調査期 間 昭和59年10月22日～10月26日（5日間）
4. 調査主体 兵庫県教育委員会

（調査担当）社会教育・文化財課

技術職員 岡田章一・渡辺 昇

5. 調査に至る経過

山陽自動車道建設に伴う路線内の分布調査によって、須恵器・土師器・陶磁器が採集されたことにより、確認調査の必要がある地点として挙げられていた個所である。大津茂川西側の西脇散布地とともに、水田部分はほぼ全域遺物が採集された。特に、中後瀬遺跡として全面調査を実施した部分と相野散布地の中央東側のトレンチ調査をした地点（センター杭No.425



第42図 相野散布地グリッド・トレンチ設定図



第43図 相野散布地

+20付近)は遺物の散布状況が稠密であった。また、北側に聳える峯相山は当地周辺に止まらず、中世を考える上に重要な文献である『峰相記』が記された舞台であり、大津茂川によって形成された微高地上に遺跡の存在が予想された。そのため、工事に先立ち確認調査を実施することになった。

6. 調査結果

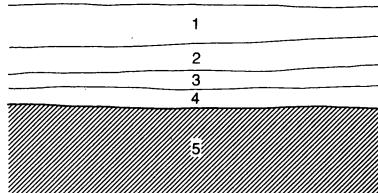
調査対象地は、東西260mに広がるものであるが、東側の70mは確認調査に入る前に工事の都合から立ち会い調査を実施した。地形的にも下がっており、遺物の散布も粗雑であったことから、立ち会い調査にしたもので遺構・包含層は検出出来なかった。また、西端の大津茂川に接した部分も地形的に下がっており、旧河道と考えられたので、重機による確認を行った。両端を除いた約180mについて確認調査を実施した。

$2 \times 2\text{ m}$ の坪(グリッド)を基準として確認を行った。基本的には 10 m ピッチで坪を設定しているが、地形を考慮して精粗が生じている。その結果、16個所(第1図)の坪を設定した。各坪で遺物は出土しているが、遺構は確認されず、包含層も坪4で認められただけであった。そのため、坪4の東側に14mのトレンチ(No.17)を設定して遺構の検出に努めたが、遺構は検出されなかった。包含層も東に約2mの所で薄くなり、調査地区内で消滅している。北側に向かって地形が上がっていることから、遺跡は北側微高地上に存在する可能性が求められる。石倉の現在の集落の方へ徐々に高くなっている、2m前後の比高差がある。坪4の地山は、淡青灰色粘土で遺構面として適した土層とは思われない。しかし、北側の石倉集落付近では茶褐色土が見られ、遺構面は十分に予想され、遺跡が存在するものと思われる。

基本層序は、耕土—床土—灰褐色土—灰色シルト(砂質土)—黄灰色(青灰色)粘土となっている。地山である黄灰色(青灰色)粘土の上に坪4では、包含層である灰色シルトが存在している。坪によっては、耕土が2面あるところも確認されたが、近現代の層と考えられる。中世以前の水田は確認されなかった。

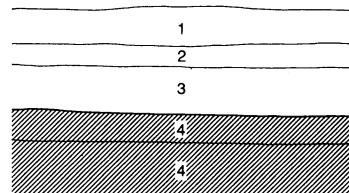
(渡辺)

2G



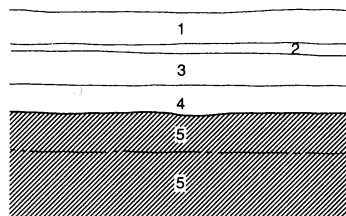
- 1.耕土
2.黄褐色土(床土)
3.淡灰褐色土
4.暗灰褐色土
5.黄褐色土

6G



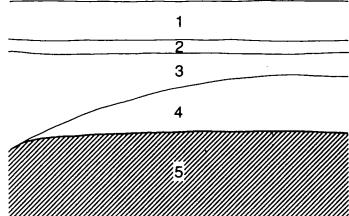
- 1.耕土
2.黄灰色粘质土
3.灰色砂レキ
4.灰褐色砂レキ

4G



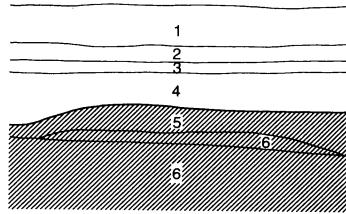
- 1.耕土
2.床土
3.暗黄褐色粘质土
4.暗灰褐色粘质土
5.黄灰色粘质土
6.黄褐色土

7G



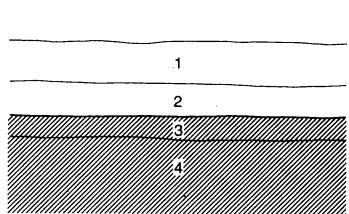
- 1.耕土
2.床土
3.灰色砂レキ
4.褐色粘质土
5.茶褐色粘质土

5G

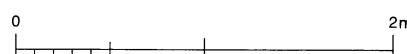


- 1.耕土
2.黄褐色土
3.黄褐色砂质土
4.灰褐色砂レキ
5.黄灰色粘质土
6.こげ茶粘土

9G



- 1.耕土
2.灰色粘质土
3.黄灰色粘土(マンガン含む)
4.黄灰色粘土



第44図 相野散布地坪掘土層断面図

7. 遺物

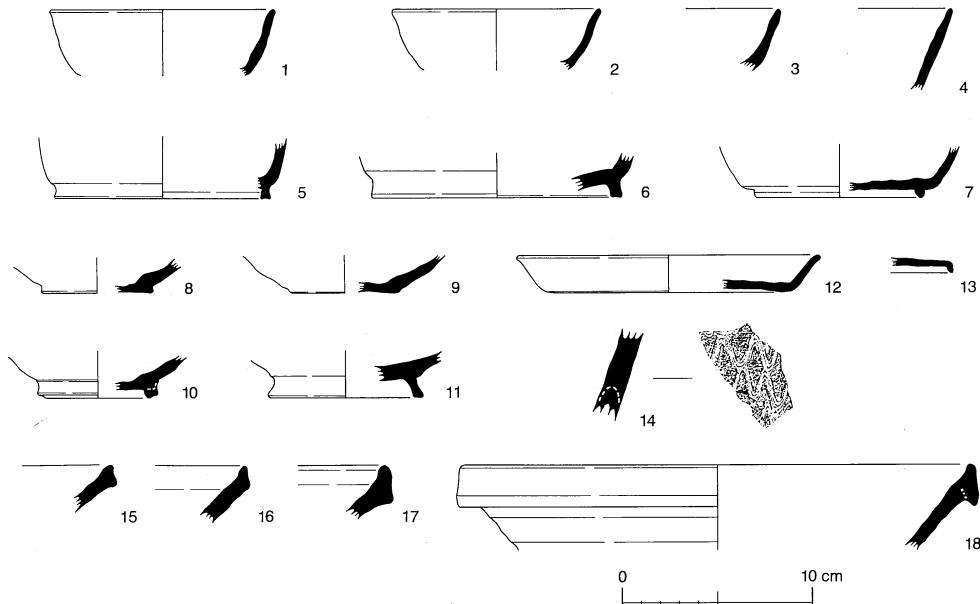
相野散布地からは、須恵器、土師器、陶磁器が出土した。完存のものはなく全て破片で出土した。従って図化できたものは24点のみである。

須 恵 器 (第45図)

出土遺物総数863点のうち、須恵器は約3割を占める。器種では壺・塊・皿・蓋・鉢等があげられるが、全て破片の為図化したものは18点である。

壺 (1～7・11) 口径及び底径のわかるものは6点であとは小片である。底部の形態は高台を有するものと、もたないものがある。(5)～(7)・(11)は底部をヘラで切り離した後、輪高台を貼り付けた（付高台）ものである。付高台の位置は、(5)(6)が底部外側に付くのに対して、(7)(11)は底部の内側寄りに付けられている。また(11)は高めの外反する高台が付く。口縁部ではやや内彎気味に立ち上がる(1)～(3)と、ほぼ直線的にのびる(4)がある。以上は時期的には奈良時代の須恵器と考えられる。

塊 (8～10) 底部のみを図化した。形態としては、糸切り平高台のものと、付高台のものがある。(8)の高台は糸による切り離しのままで、高台側面を整形せず、その高さも低い。(9)も糸切り平高台ではあるが、ほとんど高さがなく平底に近い。時期的には(8)が先行する。(10)は糸切り平高台に輪高台を付けている。これは相生窯跡群で生産されていた突帯塊の可能性が高いが、突帯部分が出土していないので確定はできない。糸切り平高台は10世紀前半から出



第45図 相野散布地出土須恵器実測図

現するが、(8)(9)の時期は1世紀後半～12世紀と考えられる。

皿 (12)図化したものは1点だけである。器高2.0cm、口径15.7cmを測り、外反する短い体部をもち、口縁端部は丸くおさめている。底部の切り離しはヘラ切りで、その後ナデによる調整がおこなわれている。また口縁部外面には重ね焼きの跡が残り、色調は灰白色である。時期は奈良時代であろう。

蓋 (13)破片としては数点出土したが図化したものは1点のみである。小片の為口径は不明だが、端部は下方に短く屈曲し、天井部はほぼ水平にのびる。宝珠つまみが付くと考えられるが出土はしていない。

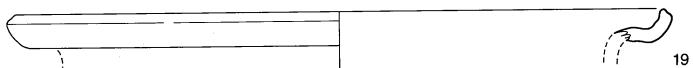
鉢 (15～18) 口縁部のみ4点図化した。口径を復原できるのは(18)で、26.6cmを測る。片口部の残るものはなかった。(15)は口縁端部に上下のつまみ出しが見られ、端面を強くナデしている。(16)は端部の上方へのつまみ出しが顕著である。(17)は(15)(16)に比べて口縁部端面が幅広くなっている。(18)は端部を上下に大きく拡張する。胎土も(15)～(17)に比べて砂粒が多く混る。また口縁端面と内面に自然釉がかかっていることから、重ねた際に最上段にあって焼かれたことがわかる。口縁部の形態からみて、(15)(16)は12世紀後半、(18)は13世紀後半～14世紀前半(17)は両者の中間時期に生産されたと考えられる。

その他 (14)内外面ヨコナデ、のち外面に4～5条一単位の波状文を施した破片である。観察できる範囲で4本の波状文が施されている。また断面には粘土の継ぎ目がみられる。小片の為器種の断定は難しい。

土 師 器 (第46図)

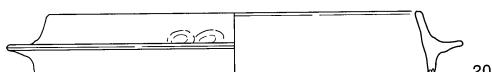
総出土遺物中土師器の占める割合が最も大きく約6割を占めるが、ほとんどが図化不可能な小片で、3点のみ図化した。

堀 (19)口縁部のみ残存する。直立すると思われる体部から外方へほぼ水平方向に屈曲し半ばほどで若干外傾して立ち上がる口縁部をもつ。内面はヨコナデ、外面は下面に指頭圧痕が残る。破片の為正確な口径は不明だが35cm前後であろう。

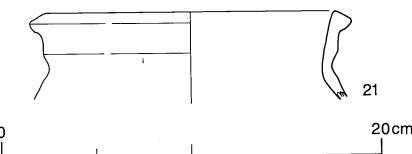


19

羽釜 (20)復原径19.5cm、残存器高3.5cmを側る。口縁は鍔からやや内傾する。磨滅の為調整は不明だが、鍔の下面にヨコナデ調整がみられる。また鍔の接着部分に指頭圧痕が残る。外面には煤が付着している。



20



21

第46図 相野散布地出土土師器実測図

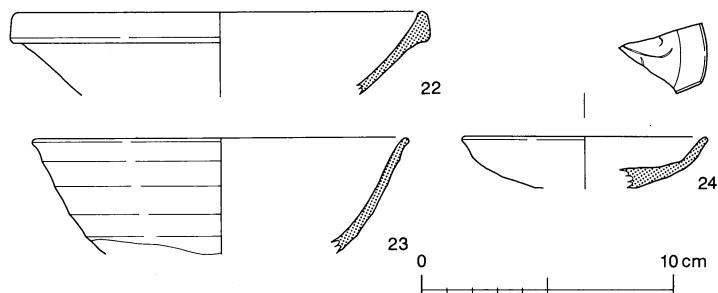
甕 (21) 口頭部はやや外傾し、口縁端部は面をなす。内面は磨滅しているが、外面はヨコナテ調整、肩部には平行叩き痕が残る。器種としては甕であるが、用途的には壠と同様である。外面には煤が多く付着している。

陶磁器（第47図）

陶磁器は22点出土した。うち図化できたものは白磁の3点である。青磁は出土しなかった。

碗 (22・23) 白磁碗であろう破片は3点出土したが、底部はなかった。(22)は口縁部が玉縁状に肥厚している。釉は灰白を帯びた白色を呈し、外面下半には施釉されていない。底部が残っていないので細分はできないが、森田・横田分類によると白磁碗IV類に分類される。(23)は口縁を外反させるもので、端部は丸くおさめている。外面は口縁端部近くまでヘラ削りをしており、灰白色の釉を高台部付近までかけている。白磁碗V-2ないしV-3類に分類される。

皿 (24) 体部上位でやや外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。底部外面は釉を削り取っている。内面見込み部はほぼ平坦で、草花文が彫られている。白磁皿VIII類に属する。（岡村）



第47図 相野散布地出土白磁実測図

参考文献

- ①森内秀造 「相生の古代窯業」『相生市史 第1巻』 1984 相生市・相生市教育委員会
- ②西口和彦・森内秀造 「相生市・緑ヶ丘窯址群」 1986 兵庫県教育委員会
- ③横田賢次郎・森田勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集4』 1986 九州歴史資料館

第3表 相野散布地出土遺物観察表

No.	出土遺構	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高			
1	4 G	須恵器	壺	(11.6)	(3.5)	体部外面半ほどでわずかに稜をもち外反する	内、外面ともロクロナデ調整	
2	4 G	須恵器	壺	(10.8)	(3.2)	体部は若干内彎 気味に立ち上がる	内、外面ともロクロナデ調整	
3	4 G	須恵器	壺		(3.3)	体部は若干内彎 気味に立ち上がる	内、外面ともロクロナデ調整 (体部内面半ばほどに強いナデ)	
4	4 G	須恵器	壺		(4.3)	体部はほぼ直線的に斜め上方に立ち上がる	内、外面ともロクロナデ調整	
5	4 G	須恵器	壺	底径 (11.2)	(3.2)	付高台をもつ。 高台部底面にナデによる凹部をもつ、外面の体部と底部の境界はわずかな稜をもって屈曲する	内、外面ともロクロナデ調整 底部ヘラ切り後輪高台貼付け	
6	4 G	須恵器	壺	底径 (13.0)	(2.35)	付高台をもつ。 内、外面とも体部と底部の境界に明瞭な稜をもって屈曲する	内、外面ともロクロナデ調整 底部ヘラ切り後輪高台貼付け	
7	4 G	須恵器	壺	底径 (8.6)	(2.75)	付高台をもつ。 外面の体部と底部の境界は丸味をもって屈曲する、高台の断面は三角形を呈する	内、外面ともロクロナデ調整 底部ヘラ切り後輪高台貼付け 底部内面に仕上げナデ	
8	12G	須恵器	壺	底径 (5.6)	(1.8)	平底高台をもつ 底部内面に段をもつ	内、外面ともロクロナデ調整 底部糸切り高台部側面は整形せず	
9	2 G	須恵器	壺	底径 (5.4)	(1.95)	低い平底高台をもつ、底部内面にわずかな段をもつ	内、外面ともロクロナデ調整 底部糸切り高台部側面は整形せず	
10	12G	須恵器	壺	底径 (5.4)	(2.25)	やや外反する付高台をもつ	内、外面ともロクロナデ調整 糸切り平高台に輪高台貼付け	突帯壺か
11	12G	須恵器	壺	底径 (8.0)	(2.4)	外反する高い付高台をもつ	内、外面ともロクロナデ調整 底部ヘラ切り後輪高台貼付け	

No.	出土遺構	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高			
12	4 G	須恵器	皿	(15.7)	2.0	外傾する短い体部をもつ、外面の体部と底部の境界は明瞭な稜をもって屈曲する	内・外面ともロクロナデ調整 底部ヘラ切りの後ナデ	口縁部外面に重ね焼痕、焼成は軟
13	4 G	須恵器	蓋		(0.8)	口縁端部は下方に短く屈曲し、天井部はそのまま水平にのびる	内・外面ともロクロナデ調整	
14	7 G	須恵器					内・外面ともヨコナデ、外面に4~5条1単位の波状文を施す、断面に粘土の縦目がみられる	鉢あるいは甕の頸部か
15	13G	須恵器	鉢		(2.5)	口縁端部若干斜め上方につまみ上げる	内・外面ともロクロナデ調整 口縁部端面に強めのヨコナデ	片口鉢か
16	13G	須恵器	鉢		(3.05)	口縁端部は上方につまみ上げる	内・外面ともロクロナデ調整	片口鉢か
17	7 G	須恵器	鉢		(2.8)	口縁端部は上方につまみ上げる	内・外面ともロクロナデ調整 口縁端部内面に強いヨコナデ	片口鉢か
18	9 G	須恵器	鉢	(26.6)	(4.5)	口縁端部は上下に拡張	内・外面ともロクロナデ調整 口縁端部内面に強いヨコナデ	片口鉢か 内面及び口縁部外面に自然釉かかる
19	13G	土師器	堀	(34.0)	(1.8)	口縁部は直立すると思われる体部から外方へほぼ水平にのび、半ほどで若干外傾して立ち上がる	口縁部内面ヨコナデ調整、口縁外面下面に指頭圧痕のこる	
20	13G	土師器	羽釜	(19.5)	(3.45)	口縁部やや内傾 体部外面上部に幅広の鍔をもつ	粘土紐巻き上げ成形、体部外面に鍔貼付の際の指頭圧痕のこる	体部外面煤付着
21	5 G	土師器	甕	(15.2)	(4.65)	口頸部はやや外傾し、口縁端部は面をなす	口頸部外面ヨコナデ調整、体部外面に平行タタキを施す	器体外面煤付着
22	7'G	白磁	磁	(16.1)	(3.3)	口縁端部は玉縁状に肥厚	ロクロケズリの後ロクロナデ調整、口縁部外面下端に強いヨコナデ、のち施釉（灰色を帶びた白色に発色）器面に気泡あり	白磁碗IV類

No.	出土遺構	種別	器種	法量		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	器高			
23	1G	白磁	磁	(14.7)	(4.6)	口縁部は外反し 口縁端部は丸味 をもつ体部外面 下半以上は露胎	外面は口縁端部付近までロク ロケズリを施す、クロナデ 調整の後施釉（灰色を帶びた 白色に発色）	白磁碗V-2な いしV-3類
24	15G	白磁	皿	(9.6)	(2.05)	口縁部は体部上 位でやや外反し て立ち上がる、 口縁端部は丸味 をもつ底部外面 露胎	内底見込みに草花文を施文、 のち施釉（灰色を帶びた白色 に発色）	白磁皿VIII類

●法量の()は復原径又は残存高を表す

図版



中後瀬遺跡周辺空中写真



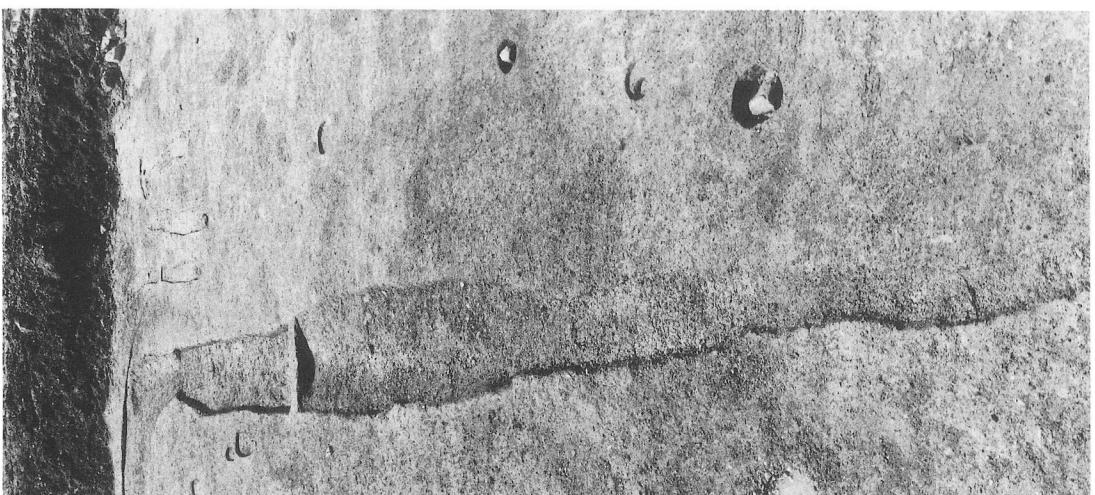
中後瀬遺跡遠景(北から)



中後瀬遺跡遠景(南から)



SD 01



SD 06





遺跡遠景



遺跡東半全景



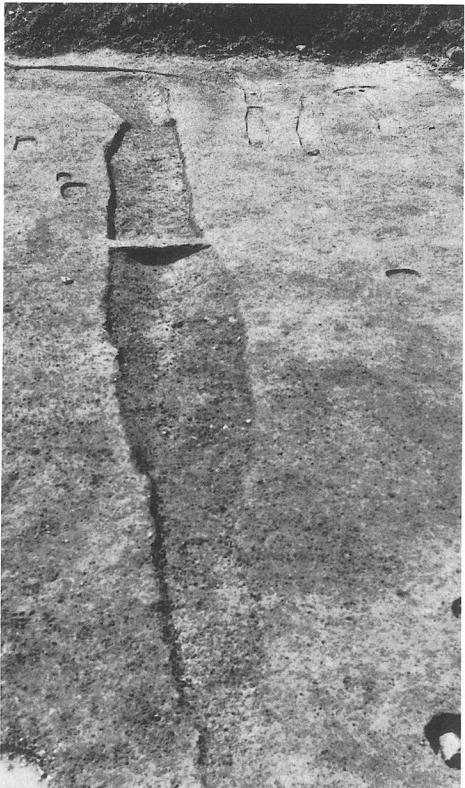
S B01



S B04～S B07



遺跡東半全景



S D04



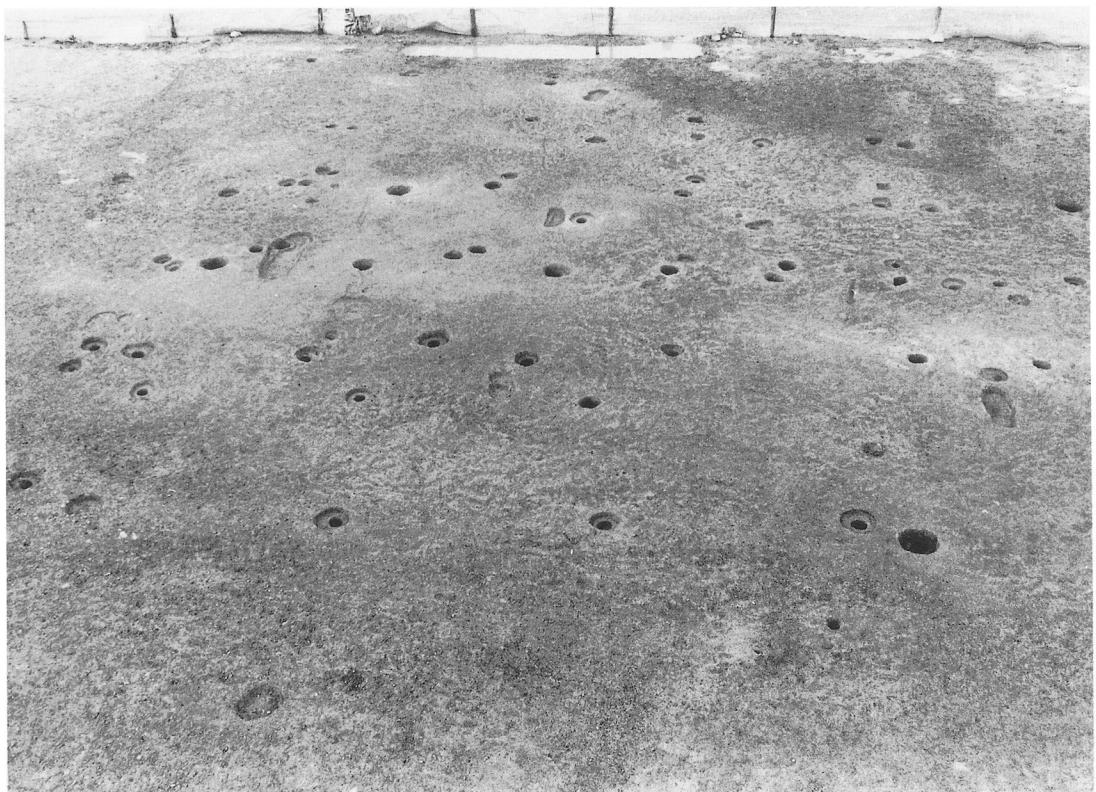
S B11



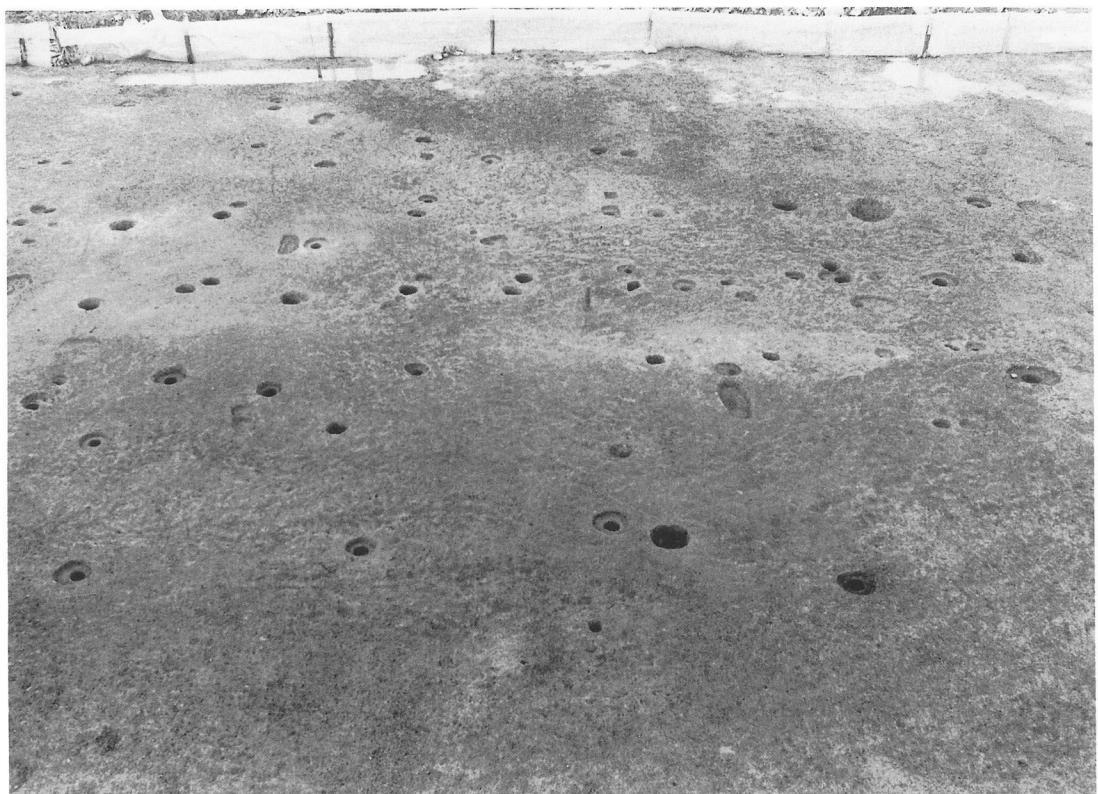
遺跡西半全景（西から）



遺跡西半全景（東から）



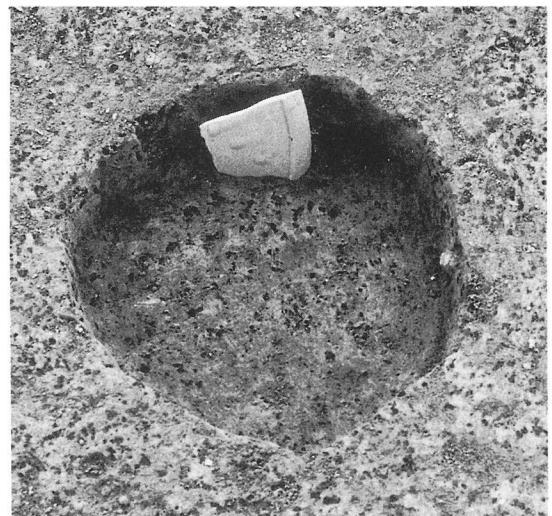
S B10～S B12



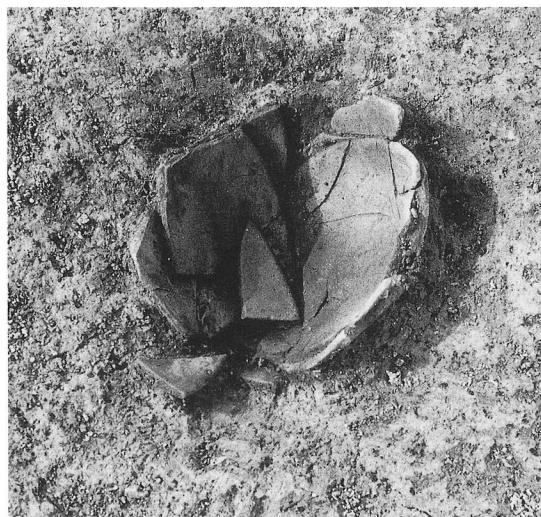
S B10～S B12



ピット 23



ピット 36



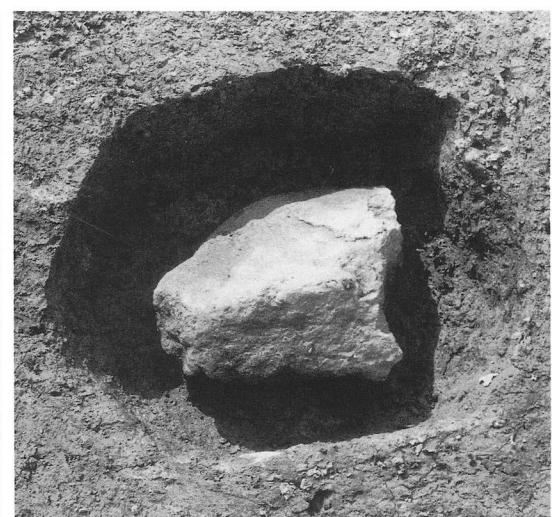
ピット 62



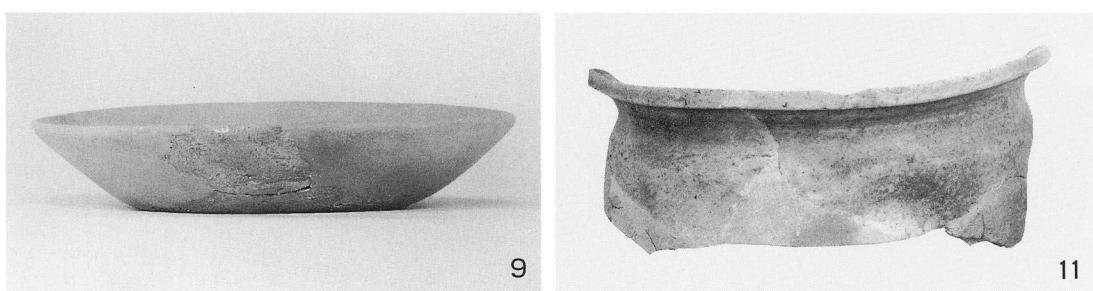
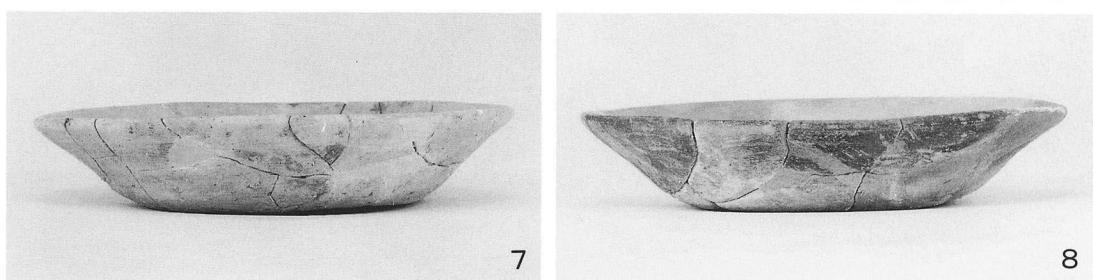
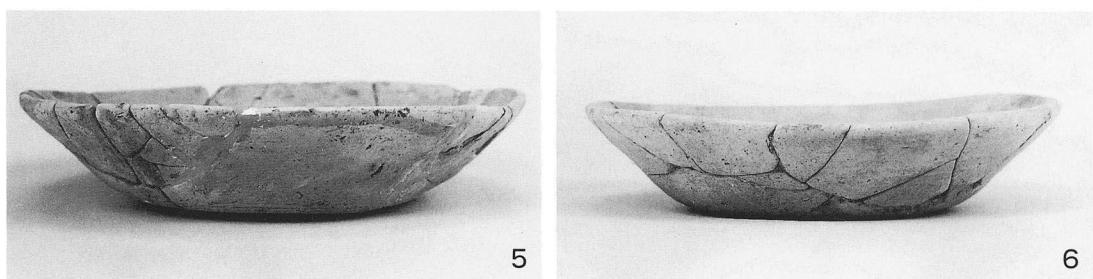
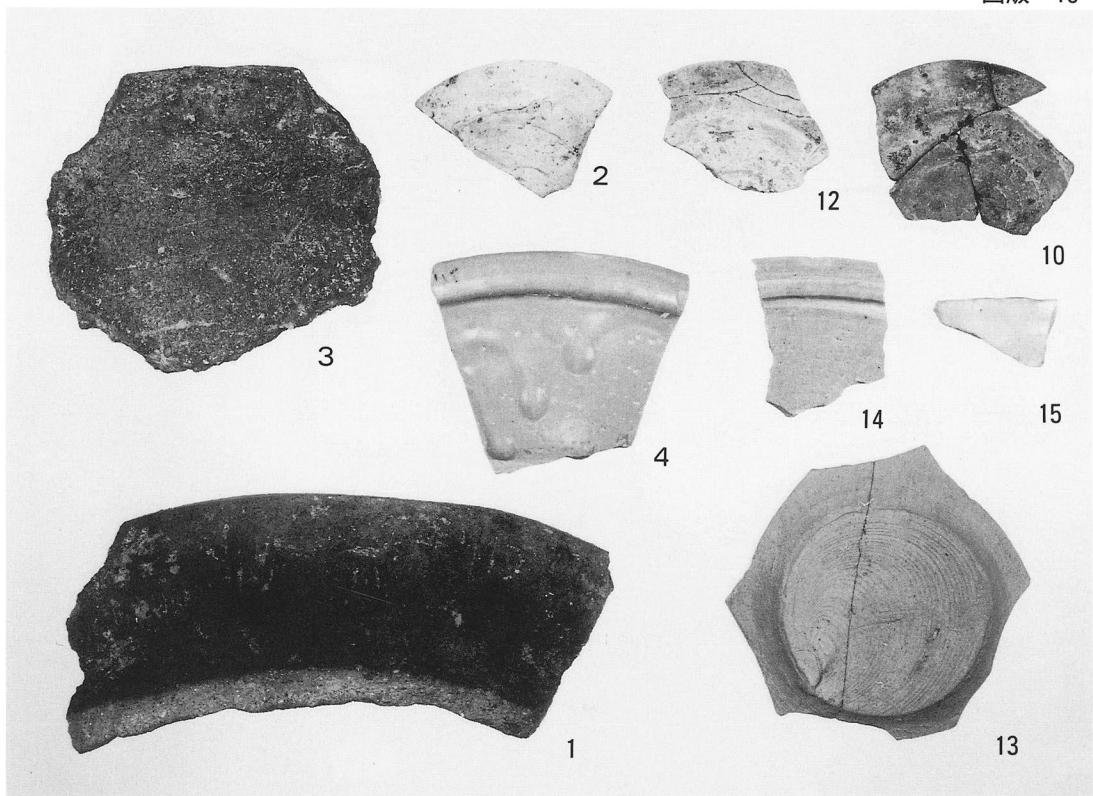
ピット 63



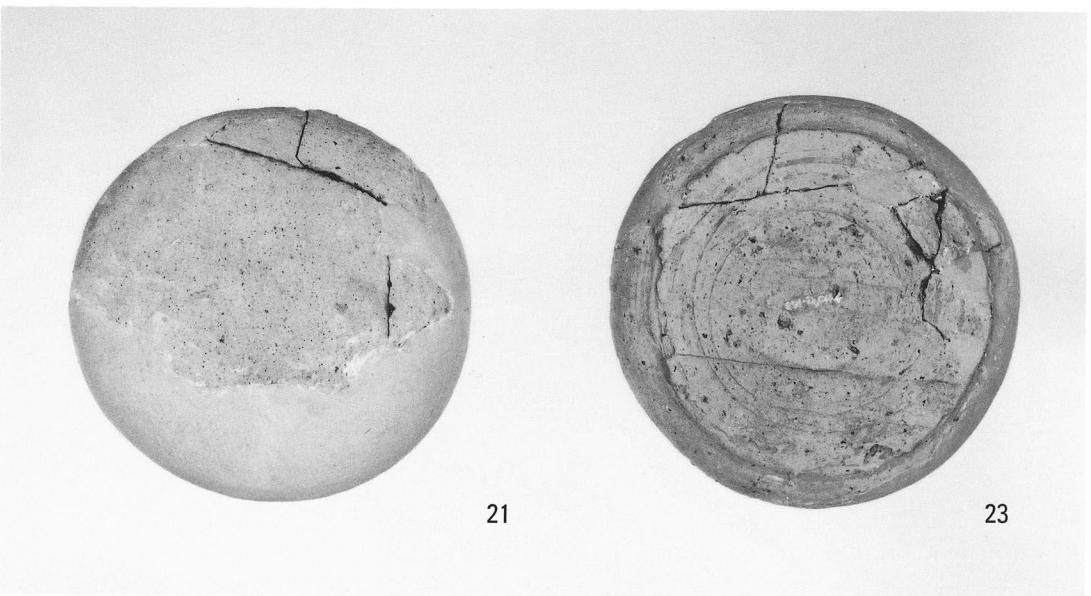
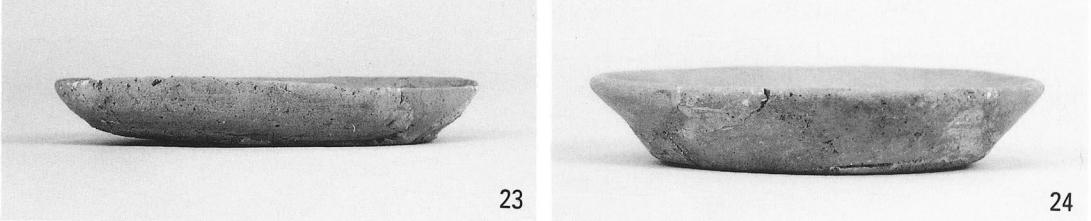
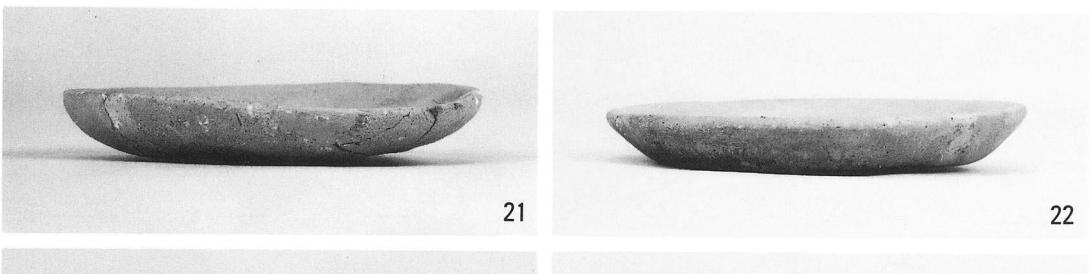
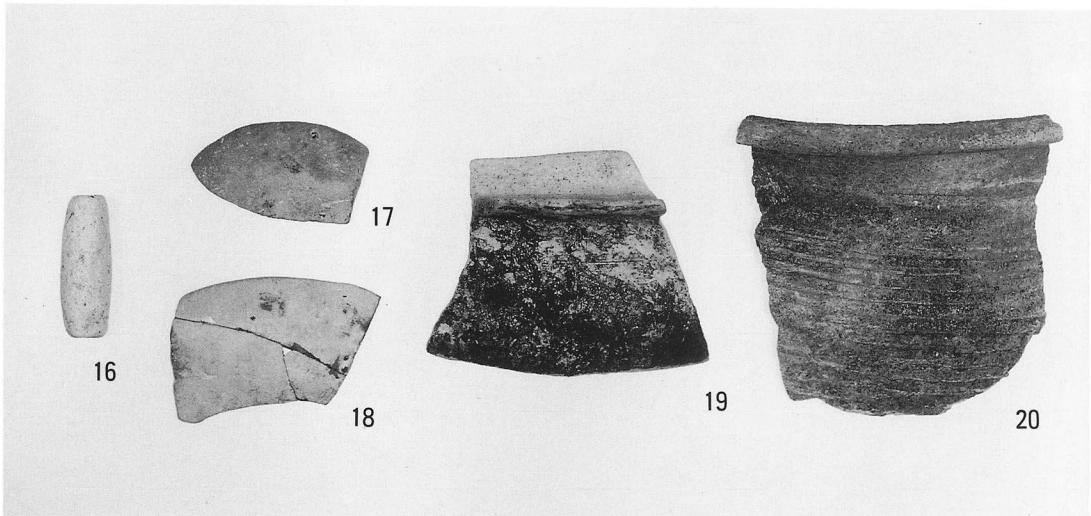
ピット 97



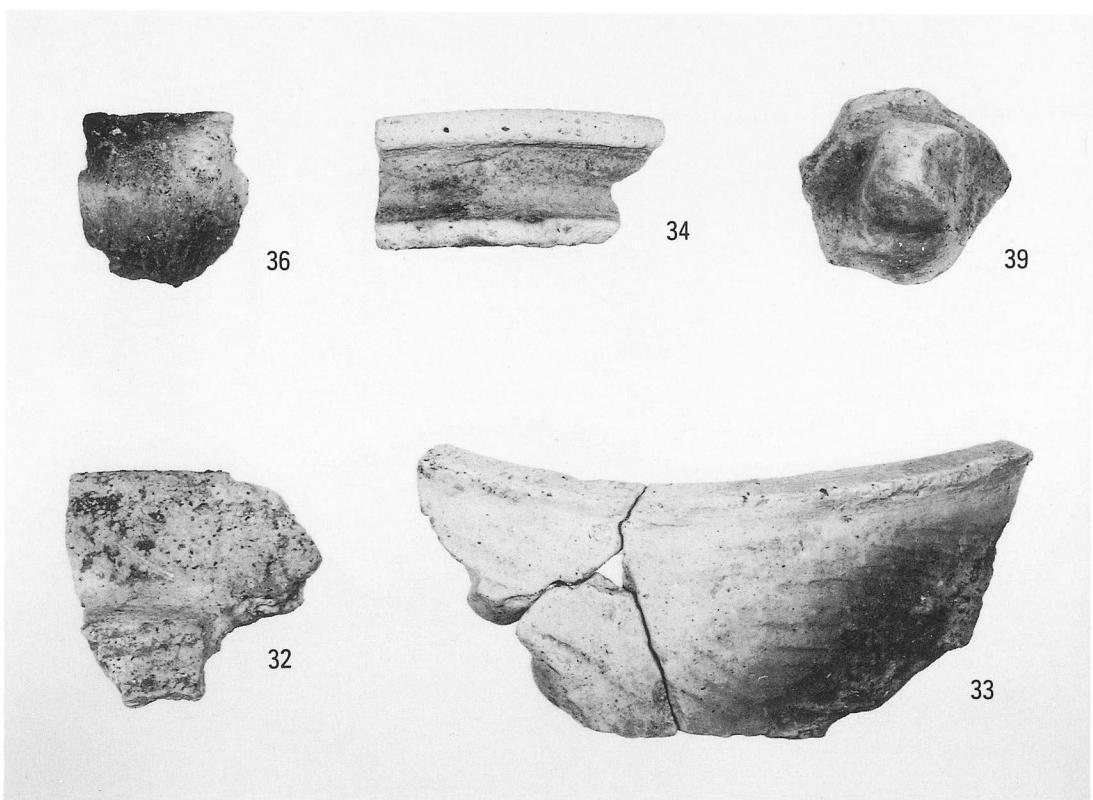
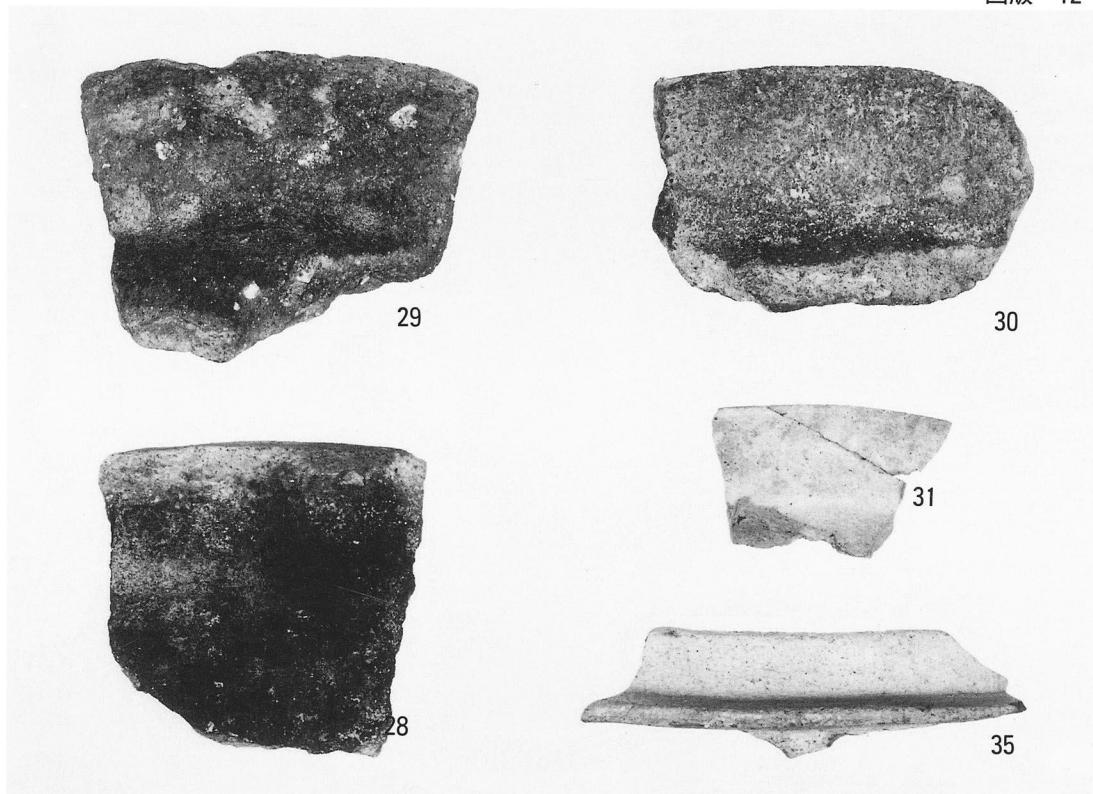
ピット 115



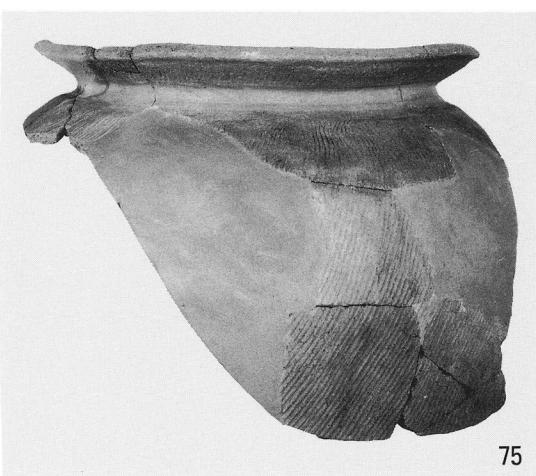
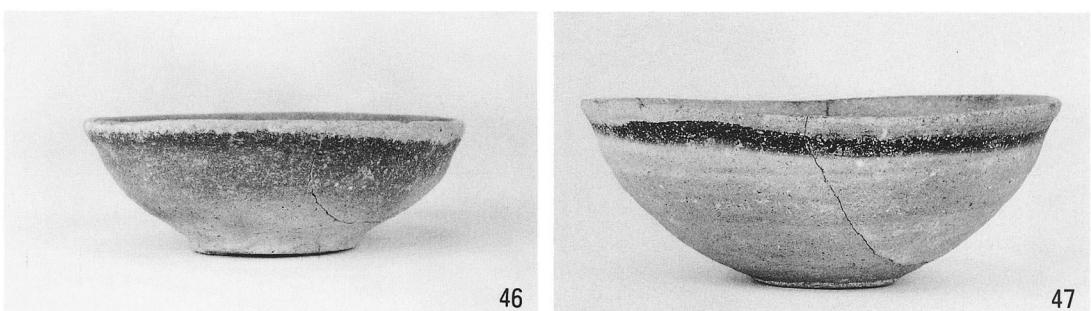
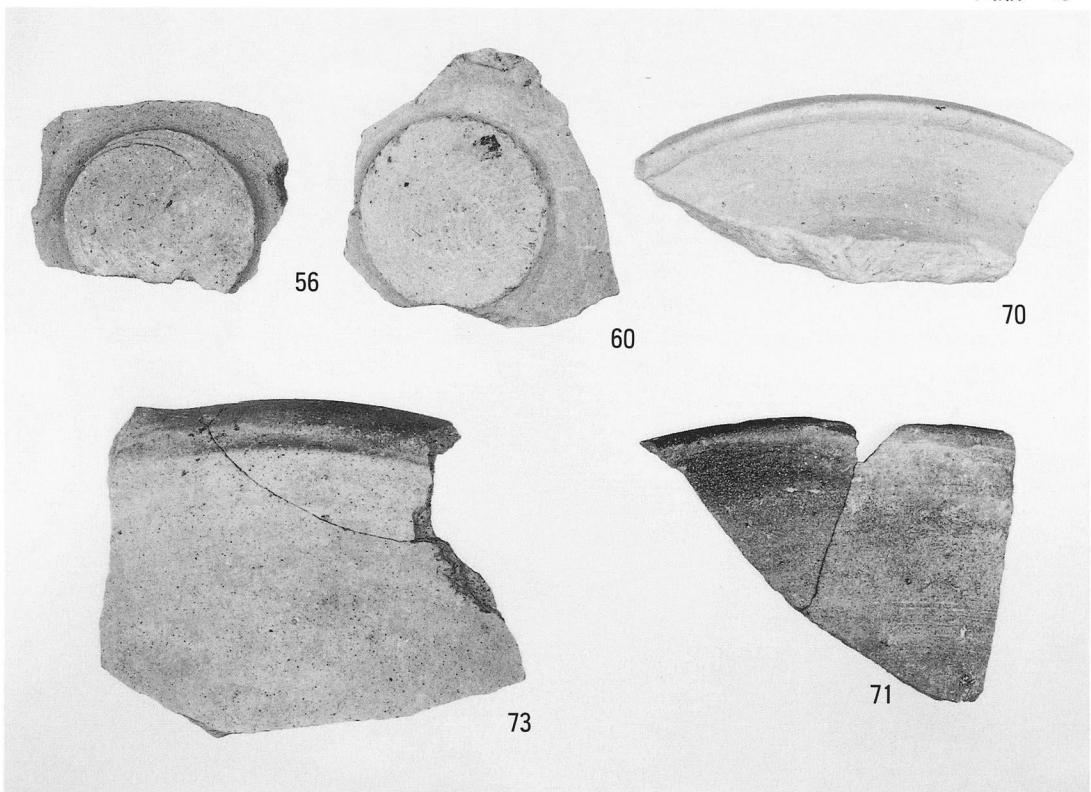
中後瀬遺跡出土遺物(1) No.11ピット



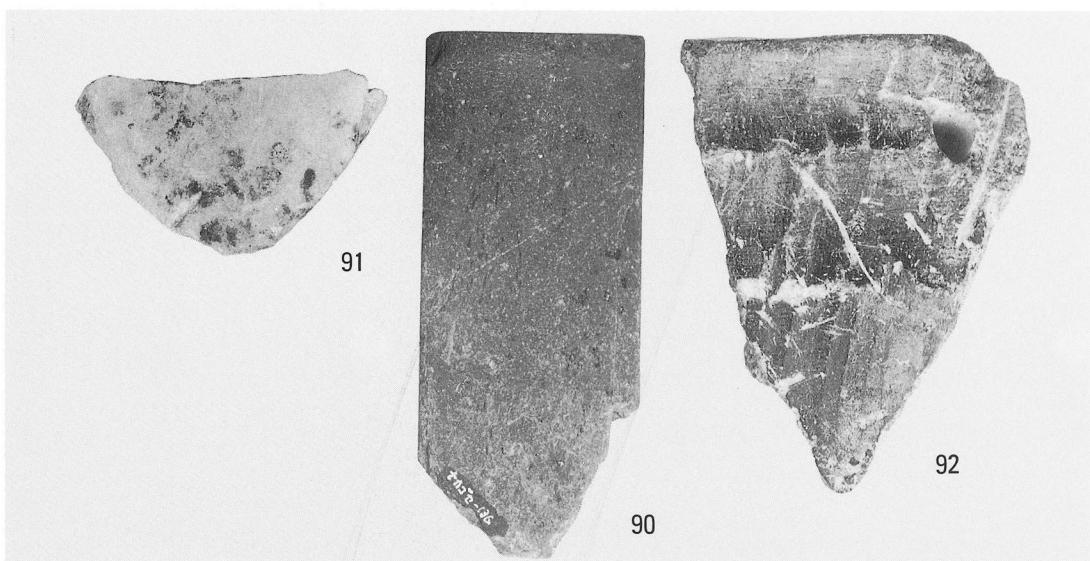
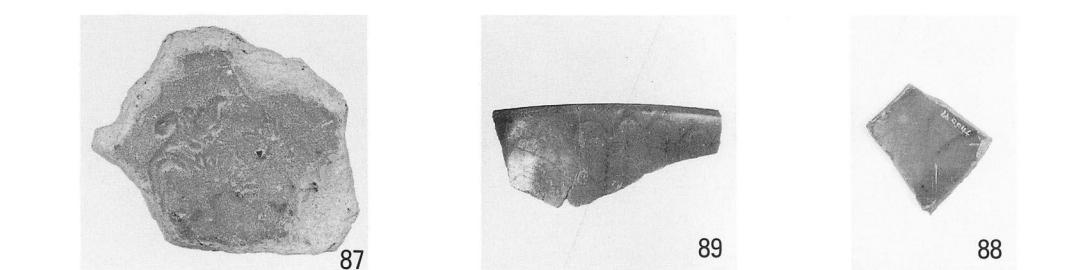
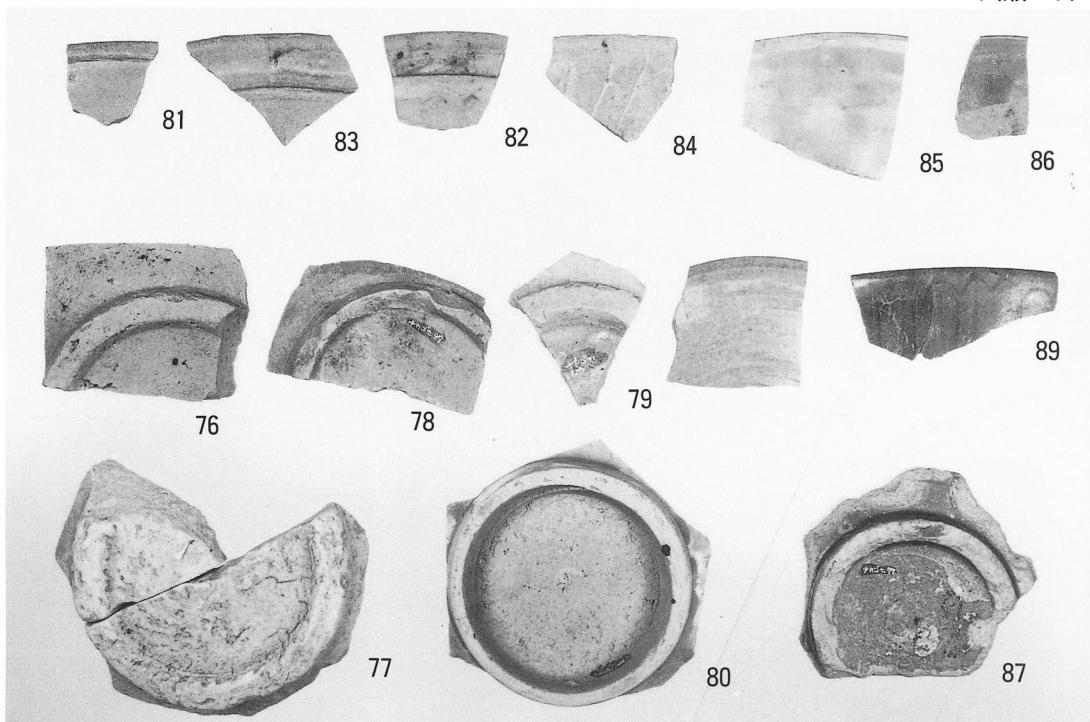
中後瀬遺跡出土遺物(2) No.16 ピット、17～20溝



中後瀬遺跡出土遺物(3)

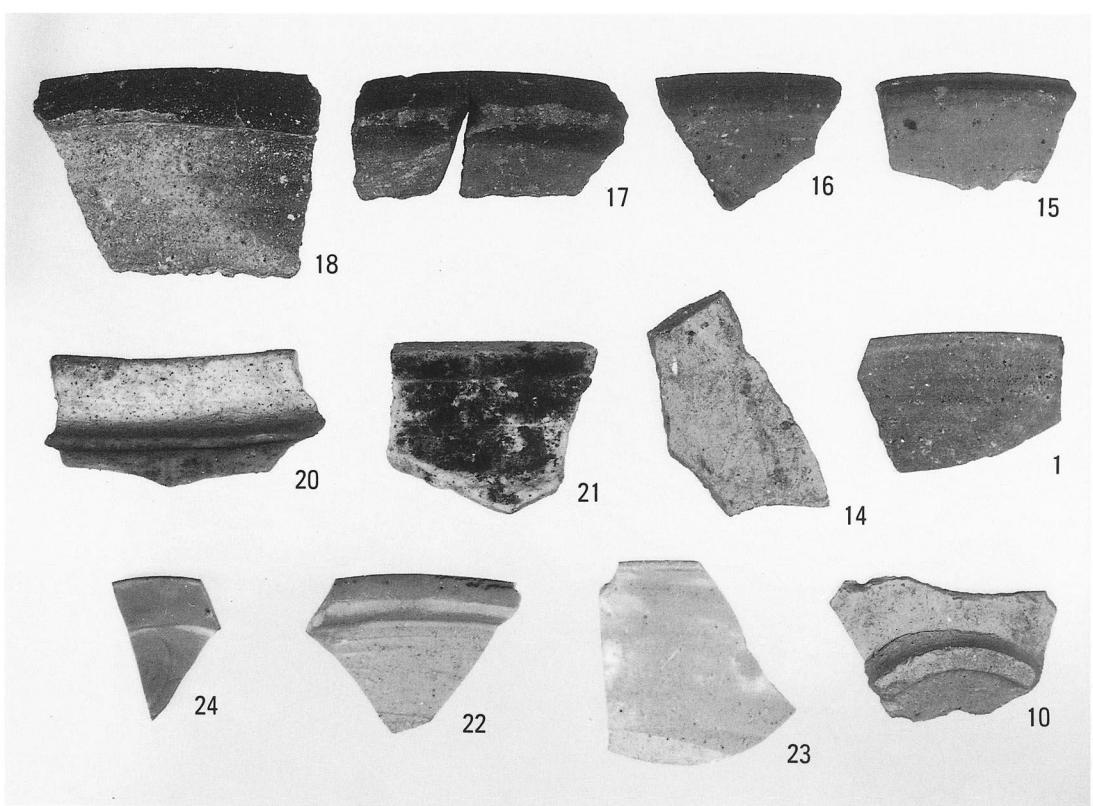


中後瀬遺跡出土遺物(4)





相野散布地遠景



相野散布地出土遺物

兵庫県文化財調査報告 第59冊

中後瀬遺跡

—山陽自動車道関係
埋蔵文化財調査報告VIII—

昭和63年3月31日発行

編集 兵庫県埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL(078)531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL(078)341-7711

印刷 船場印刷株式会社
〒670 姫路市定元町4の2
TEL(0792)96-3535
